

近親相姦 一妹で嫁で肉奴隷

闇の店

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイムリープして四十年前に戻った俺は心残りだった妹を自分にものにするという夢を晴らすため、小学生の妹を調教し、肉奴隷にすることに成功する。それから三年、妹の通う中学校の旧校舎で愛し合った俺たちはそれを妹の同級生に見られてしまう。俺は自らも兄に告白されて悩んでいるというその少女に近親相姦の素晴らしさと覚悟を説き、彼女は兄を受け入れることを決断する。彼女の兄にリスペクトされた俺は兄の肉奴隷になった二人の妹を調教することになり、新たな肉欲の日々が始まる。

# 目次

プロローグ	— 妹・最愛の肉奴隷	1
旧校舎の密会	—	6
近親相姦指南	—	14
幸せの伝播	—	23
二人の肉奴隷	— ザーメン味比べ	34
二人の肉奴隷	— 浣腸我慢比べ	45
二人の肉奴隷	— 二穴絶頂	52
快樂に溺れる兄妹たち	—	60
水着の肉奴隷	—	68
隷属の味	—	75
コスプレ美少女戦士	—	85
偽りの彼氏	—	93
本当の結婚式	—	99

## プロローグ ―妹・最愛の肉奴隷

「んっ……」

離れた唇の間に唾液の糸が伸びる。目を開けると上気した妹の顔が目の前にあり、その色気のある美しさにドキリとしてしまう。毎日時間の許す限り間近で見ているのに、見慣れるということがない。見るたびに美しさと淫靡さが増していくような気がする。胸を揉む手に思わず力がこもる。妹も俺も全裸だ。俺は居間のテーブルで期末試験の勉強をしている。膝に妹を乗せながら。

「んんっー」

「ごめん、痛かったか？」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

そう言っただけで微笑む妹。あまりの可愛さに今離れたばかりの唇をまた妹のそれに重ねる。股間でペニスがガチガチに勃起する。ダメだ、今日は試験勉強に集中してセックスはしないつもりだったが、我慢できそうにない。

「するの？今日は勉強優先って……」

俺の顔とペニスの熱さで妹がすぐ俺の欲情を察する。阿吽の呼吸というか魂で繋がっているというか、俺と妹はお互いを見るだけで相手の気持ちを感じられる。

「明美があんまり可愛いから我慢できなくなっちゃったよ。やっぱり抱き合っただけで勉強するのは無理があるな」

「だから言っただけじゃない。お兄ちゃん、すぐしたくなっちゃうんだから」

「お前が可愛すぎるのがいけないんだよ。どれだけお兄ちゃんを狂わせれば気が済むんだ」

「バカ」

そう言いながら妹の顔はもう期待に溢れている。股間に手を伸ばすと、そこはもうびっしりと濡れていた。

「お前だっただけでなくなってるじゃないか」

「昨日してないんだもん。そんなにおちんちん硬くしてたら期待し

ちやうよ」

「じゃあベッド行くか」

「うん」

俺たちは立ち上がり手を繋いで俺の部屋へ向かった。片時でも妹と離れたくない。もう病気と言っていただろう。

「お兄ちゃん……」

全裸の妹がベッドに仰向けになり、潤んだ瞳で俺を見つめる。俺はそそくさとコンドームを付け、妹の上に覆いかぶさる。

「入れるよ」

「うん」

「おねだりして」

「お兄ちゃんの硬いおちんちんでいやらしい肉奴隷の明美のオマンコをめちやくちやにかき回してください」

「明美っ！」

妹のオマンコへ硬くなったペニスを一気に挿入する。待ち構えていたように妹の膣がきゆうつと締まり、兄の来訪を歓迎してくれる。たまらない快感に身を震わせながら必死に腰を動かす。妹の顔が蕩けていくのを見ながら、無上の幸福感に浸る。

「お兄……ちやあん！」

「いいか!? 気持ちいいか!? 明美」

「いいよお！ 気持ちいいの！ お兄ちゃんのおちんちん……ああっ！」

「明美っ！」

唇を重ね、強く強く妹の体を抱きながら、俺は最愛の女性の中で絶頂を迎えた。

三流大学からブラック企業勤めという冴えない負け組人生を送っていた俺は五十を前に体を壊し、医者から余命宣告を受けた。そしてあつけなく死んだ俺だったが、気が付くと四十年近く前にタイムリールプしていた。中学生に戻った俺は前の人生での最大の心残りを今度

こそ叶えようと決意した。シスコンだった俺の最大の心残り、それは妹を自分だけの肉奴隷にせずと愛し続けることだった。俺はまだ小3の妹に性的な行為を教えて性の快感に目覚めさせ、四年生になる春休みに処女を奪った。最初は嫌がっていた妹だったが、何度も必死に説得し近親相姦の快感に溺れさせていった。そして夏休みに入る直前、俺は妹に自分の意志で俺の肉奴隷になることを決意させた。

「私をお兄ちゃんの肉奴隷にしてください!」

妹が目の前で全裸になりそう宣言した日のことは今でもはつきり覚えているし、8mmカメラの映像としても残してある。今でも時折あの日に交わした隷属式の誓いを見直しては感動に浸りながら妹と繋がっている。妹が肉奴隷になってくれた小4の年はとにかく狂ったように妹の体を求めた。勤めている母が休みの日以外は毎日時間の許す限りセックスをし、ザーメンを一滴残らず妹に注ぎ込んだ。フェラチオやアナルセックスも数え切れないくらいして全ての穴を俺専用の肉便器にした。俺の夢は叶えられたのだ。

「愛してるよ、明美」

射精の余韻に浸りながらゆっくりペニスを抜く。あれから3年。妹は中一に、俺は高二になっていた。あの頃に比べると、セックスの回数は減ってきている。妹に初潮が来たのが大きな原因の一つだが、それ以上に俺たちはお互い傍にいて抱き合うだけで満足感を得られるようになっていた。心から一つになれたのだと思う。といってもかなりの美少女に成長した妹への欲情が薄まることなどまるでなく、今日のようにセックスはしないでおこうと思っても結局はこうなってしまう。回数が減ったというのは単に一日にする回数が、ということだった。

「ほら、こんなに出了よ」

コンドームを外して妹に見せる。我ながら呆れるくらいの量だ。妹が赤くなつた顔でそれを見つめ、黙って口を開く。俺はコンドームを逆さにして中のザーメンを妹の口に流し込む。俺のザーメンは一滴残らず妹の中に注ぐというのが肉奴隷になった時の約束の一つだ。指で絞り出して全て口内に注ぐと、妹が口を閉じ中で舌を動かす。鼻

で呼吸をし、俺の味と臭いをじっくり感じ取る。フェラチオの時もそうだが、口にザーメンを注がれた時のルールだ。

「飲んでいいよ」

俺の言葉に妹が喉を鳴らしてザーメンを嚥下する。このザーメンを飲む喉の音が俺は大好きだ。毎回心が喜びで満たされる。

「明美、ついでにおしっこもするよ」

妹が頷いてペニスを口に含む。肉奴隷にして間もなく小便を飲ませるようにした。それ以来可能な限り妹の口に放尿している。小便をするのに学校以外のトイレを使った覚えがあまりないほどだ。外出先でも人目のない所を探しては妹に飲んでもらっている。妹の口便器は本当に最高で、この快感を知ってしまったらもうトイレの便器など使えなくなる。

「ああ……」

妹が喉を鳴らして俺の小便を飲んでいいる。放尿の快感と妹を肉便器にしている悦びで頭がくらくらするような幸せを感じる。これからもずっとこの快感を貪れるのだと思うと本当に嬉しくなる。

「もうすぐ安全日だね。お兄ちゃんもう待ちきれないよ」

「もう。ゴムはしてるけどほとんど毎日してるじゃない」

「明美の子宮に出すのが最高なんだよ」

「また学校休むの？」

「うーん、毎月同じ時期に休んでたらさすがに怪しまれるか。先月は連休に重なったからよかったけど」

「でもしたいんですけど？一日中」

「お前だつてそうだろう」

安全日は生で思いっきりセックスをする。あまりに盛り上がって学校を休んで繋がることも度々だ。母が出かけてから家に戻り、仕事から帰るまでずっと愛し合うのだ。

「初日だけは休もう。お兄ちゃん、我慢できる気がしない」

「うん、いっぱいしてね」

「ああ。明美の子宮、お兄ちゃんのザーメンでパンパンに満たしてやるからな」

妹を抱きしめ、もう一度キスをする。出来る事ならこの時間が永遠に続いて欲しい、と心から願いながら。

## 旧校舎の密会

妹がようやく安全日を迎えたその日、予定外のこと起きた。母が体調を崩し、仕事を休んだのだ。看病をしようとしたのだが、大したことはないから学校に行けと言われ、俺と妹は戸惑った。元々学校を休んで一日中セックスするつもりだったので、今更授業を受ける気にならなかつたのだ。

「どうする？お兄ちゃん。やっぱり学校行く？」

並んで歩きながら妹が訊いてくる。妹の通う中学と俺の通う高校は方向が別だ。学校に行くならここで別れなければならないが、安全日のセックスに向けて一昨日から禁欲していた俺の体はもう辛抱たまらない状態になっていた。

「あの旧校舎、まだそのままか？」

ふと思いつき妹に尋ねる。妹の通う中学、つまり俺が一昨年卒業したそこには使われなくなった旧校舎が敷地内に残っていた。木造のその校舎は壁が老朽化して板が外れる箇所がある。俺は在学中にそれを発見していた。

「うん、そのままだけど」

「俺がいた時のままなら中に入れる。あそこなら誰もいないはずだ」

「が、学校でするの!?ダメだよ、もし見つかったら」

「小学校の時だって教室でしたじゃないか。しかも自分の教室で」

「だけど……」

「もう我慢できないんだ。な？」

「もう、しょうがないなあ」

妹は渋々承知する。とはいっても妹も俺としたいのは同じなのだ。顔を見れば分かる。俺たちは授業が始まる時間まで待つて中学の裏門に向かい、人目がないことを確認して中に入った。旧校舎に着くと、目当ての場所に手をかける。幸い修理はされておらず、板が外れて中へ入れた。

「さすがに埃臭いけど思ったほど汚れてないな」

俺がいた時はまだ取り壊す予定がなく昔の書類などが保管されていたので、定期的に業者が清掃に入っていたはずだ。今もそうなのかもしれない。入ってきた場所はそんな倉庫の一つになっていた。鉄製のラックにいくつもの段ボールが積まれている。その前に置かれた丸テーブルにも箱が一つ載っており、中を見ると書類の束と何故か古いタオルが入っている。

「丁度いい」

俺たちは使われなくなった教室の一つに入り、箱から出したタオルで机の上の埃を払った。机を何個かくつつけてその上に全裸にした妹を横たわらせる。

「本当にここにできるの？」

「ああ。誰もいないはずだけど、声は抑えろよ。外に漏れるかもしれないからな」

自分も全裸になり、妹の腰を引いて机の端に持つてくる。下に垂れた足の間に腰を入れ、ペニスをオマンコにあてがう。

「いくぞ」

「うん」

一気にペニスを妹の奥まで突っ込む。子宮口に龟头が当たり、得も言われぬ快感が全身を走った。

「ああ……」

数え切れないくらい挿入しているのに頭が痺れるくらい気持ちいい。最初はゆつくりと、徐々に速く腰を動かし、妹の膣の感触を楽しむ。

「んんっ！」

妹が手の甲を噛み喘ぎ声をこらえる。生の挿入はお互い最高の快感だ。気を抜くと俺もオスの雄叫びを上げそうになる。

「おおっ！最高だ！出すぞ、明美！」

腰がじいんと痺れ、大量のザーメンが妹の子宮へと放たれる。頭が真っ白になる快感に包まれ、近親相姦の悦びに浸る。

「ああ……やっぱり中出しは最高だな。毎日生でしたいよ」

「私も直接注いで欲しいけど、妊娠はダメだよ」

「分かってるよ。お兄ちゃんはお前を幸せにするって約束したからな。お前の歳で妊娠させたらこの関係を続けられなくなっちゃうしな。でも初潮が来るまでは毎日生でやりまくってたから、そのときの快感が忘れられないんだよな」

「普通は初潮が来る前の妹を犯したりはしないんだよ」

「お兄ちゃんと明美は普通じゃない。世界で一番気持ちいいセックスをして、世界一幸せになったんだ。そうだろ?」

「世界一変態のお兄ちゃんのせいで私は世界一いやらしい肉便器になっちゃったけどね。でも最高に幸せだよ」

「明美……」

「今日はいっぱい出してね。私も本当は我慢できなかつたんだ」

「ああ」

繋がったまま腰を振り、あれだけ大量に出しても硬いままのペニスで妹の膣内を擦る。出したばかりのザーメンを潤滑油にして激しく出し入れし、妹の体を存分に味わう。ぐちゅぐちゅといやらしい音を立ててザーメンが床に零れ落ちる。

「ううっ……いいい! 明美、おねだりして。お兄ちゃんがまたいっぱい出せるように」

「お、お兄ちゃん、明美のオマンコに……いやらしい肉奴隷の明美のオマンコにお兄ちゃんの熱いザーメンをいっぱい注いでください。明美の肉便器子宮をお兄ちゃんのザーメンでパンパンに満たしてください!」

「明美っ! 愛してるぞ! 明美いつ!!」

ぐうっと射精感が高まって来る。胸を揉み、乳首に吸い付きながら一気に欲情を解き放つ。

ぶびゅうううっ!!

二度目とは思えぬ大量のザーメンが妹の中にぶちまけられる。膣内に収まり切れない白濁液が逆流して足元にザーメン溜まりを作る。

「ふああっ! お兄ちゃあん!!」

妹の背中がしなり、細かく痙攣する。絶頂を迎えた印だ。最愛の妹をイカせた満足感で幸せになる。

「はあ、はあ……」

荒い息を吐いて、中一とは思えぬ淫靡な表情を浮かべる妹を見つめる。かつて同じ中学生たちが授業を受けていた教室で、妹は実の兄とセックスをしているのだ。小4の時、運動会の日には妹の教室でセックスしたことを思い出す。俺が教師役になって疑似授業をし、クラスメイトに見られていることを想像しながら犯された妹の痴態は本当に美しかった。

「今度は背面座位だ」

妹をうつ伏せにして後ろから貫き、そのまま椅子に腰を下ろす。膝の上に妹を乗せ、子宮を思いきり突き上げる。

「ああっ！お、お兄ちゃん！あ、熱い！おちんちん、熱いよおっ!!」  
「くっ！全然収まらないぞ！明美のオマンコ気持ち良すぎておちんちんが全然萎えない！いくらでも出せる！明美の中に一滴残らず注ぎ込むぞ!!」

「出してえっ！明美の中に全部出して！肉便器子宮、いっぱいにしてえっ！」

身も心もどろどろに溶けて一つに混ざり合うような感覚がする。三年間毎日のように繋がってきた俺と妹の体はもう一つの生命体になっっているような気がした。

「くああっ!!」

子宮口に亀頭を押し当て、快感に震える。三度目の射精が妹の子宮を満たす。

「お兄ちゃああああん!!」

甘えるような、泣き声のような嬌声を上げて妹がイク。お互いの体がシンクロしたように震える。完全に一つになった兄妹が最高の幸せに酔いしれる。

「はああ……」

絶頂の余韻に浸りながら唇を重ねる。吸い付くような肌の感触を堪能しながら胸を揉む。夢の中を彷徨っているような至福の時間だ。

「お兄ちゃん」

妹が立ちあがり、体の向きを変えて俺のペニスを握りながら再び腰

を下ろす。対面座位で繋がってお互いを強く抱きしめあう。

「私、どうにかなっっちゃいそう」

「俺もだよ。このままずっと繋がっていたい」

愛しさが爆発しそうで心がぞわぞわする。三度も出したペニスは硬さを失わず妹を貫いたままだ。かつては神聖な学び舎だった場所で実の兄弟が繋がっている。只の兄弟ではない。妹は俺の肉奴隷だ。俺に犯されるためだけに生きると自らの意思で堕ちた最愛の肉便器だ。タイムリープで人生をやり直して遂に掴んだ最高の宝物だ。

「愛してるよ。お兄ちゃんものになつてくれて本当にありがとう」

「私も。近親相姦の悦びを教えてください、お兄ちゃんの肉奴隷にしてくださいありがとう」

「明美」

抱き合つたままザーメンでヌルヌルになった膣内を突き上げる。俺と妹は一つになるために生まれてきたのだ。それを確かに実感する。

「ううっ!!」

妹の子宮に四度目の飛沫が噴き上がる。腰が痺れ、膝がガクガクと震える。

「熱い……熱いよ、お兄ちゃん」

妹が快感に顔を歪め呟く。あまりの気持ちよさに何も考えられず、俺はただ涙を浮かべて頷いた。

「おしっこしたくなっちゃった」

俺の膝の上で脱力した妹が言う。ゆっくりとペニスを抜き、机の上に座らせる。

「このトイレ、使えるのかな？」

「いいよ、ここだしな。お兄ちゃんが飲んであげる」

「え？でも……」

「おしっこした後何回も舐めてあげたら。お兄ちゃんと明美はお互いの肉便器なんだよ」

「うん」

机の上に座った字？妹の足を開かせ、目にしやがみこむ。口を開け

ると妹の股間から薄黄色の液体が勢いよく放たれる。

「ああ……」

兄の口に放尿しながら妹が顔を赤くして声を漏らす。大量に射精した後なのでザーメンが混じっているだろうが、かまわず妹の小便を口で受け止める。だが最初から飲尿するのは初めてなので中々全部を受け止めることが出来ない。結構床に垂らしてしまう。

「中々難しいな。ペニスを銜えられる分、やっぱり男のおしっこの方が飲ませやすいみたいだな」

「床びしょびしょになっっちゃったね」

「タオルで拭いておこう。誰も使ってないんだから少しくらいは大丈夫だよ」

妹の股間に舌を伸ばし、放尿の後のオマンコを丁寧に舐める。そのうちに自分も尿意を催してきた。

「お兄ちゃんもおしっこだ」

「うん」

妹が机から降り俺の前に跪く。亀頭を舐めてからペニスを口に含む。俺は思うまま妹の口内に放尿した。やはり妹の口便器は最高だ。いつでもどこでも妹に小便を飲ませられる幸せに心が満たされる。

「少し休んでから再開するか。今度はお尻に出してあげる」

「本当に元気だね。誰かに見つからないかな？」

「授業中だし誰も来ないだろ」

俺たちはそれから散々愛し合い、午後の授業が終わる前にこっそり旧校舎を抜け出した。腹が減っていたので途中でパンを買い、少し時間差をつけて家へ帰る。母は思ったより具合がよさそうで安心した。俺は母に休んでもらい久しぶりに夕食を作ることにした。妹にも手伝ってもらったが、台所でも俺たちは手を繋いだりキスをしたりした。時間の許す限り繋がるというのが俺たちの決まり事だ。

「今日はありがとう。じゃあ先に休むね」

夕食の後、母は二階に上がって休んだ。俺は風呂を沸かし、久しぶりに妹と二人で入浴する。

「狭くなっただな」

妹と湯船につかりながら呟く。妹が小学生の時は一緒に入っても多少余裕があったが、今はキツキツだ。お互い成長したのだと実感する。

「うちのお風呂小さいもんね。もうすぐ一緒には入れなくなるね」  
「こうやって風呂の中でお前を抱きしめるのが好きなんだけどな」  
「いつだって抱きしめてるじゃない。お風呂上りにセックスするのもしょっちゅうだし」

「風呂上がりの明美が最高なんだよ。この後もしような」

「ママに気づかれちゃうよ」

「声を我慢すれば大丈夫さ」

「それが出来ないの分かってるでしょ？お兄ちゃんのおちんちん入れられたら声が出ちゃうの」

「唇で塞いでやるよ。このまま明日まで出来ないなんて無理」

「学校でいっぱいしたでしょ」

「明美にはいくらでも出せる。それでなくても二日してなかったんだ。辛かったんだよ」

「私もそうだけど……あんまり激しくしないでね。本当に声我慢できないから」

「明美のオマンコ気持ち良すぎて我を忘れちゃうんだよな。一応気を付ける」

「もう。しょうがないなあ」

俺は嬉々として妹をベッドに連れ込み、体を重ねた。昼間あれだけしたのに興奮は収まることがない。膣内の感触を楽しみながら無心に腰を振る。

「お、お兄ちゃ……だから激しくしちゃ……んんあっ！」

兄に犯される快感によがる妹の口を塞ぎ、舌を絡ませながら子宮口を突く。妹の手が俺の背中に回り、強く抱き寄せてくる。

「明美、可愛いよ」

「ああ……出して。お兄ちゃんのザーメンで明美の子宮塞いで！」

「うっっ!!」

まだ十二歳の中一の妹の子宮を兄の熱いザーメンが満たしていく。

風呂上がりの妹の甘い香りを嗅ぎながら俺は至高の快感に全身を震わせていた。

## 近親相姦指南

翌日、二日続けて休むわけにもいかないなので学校に行った俺は授業が終わるとすぐに帰宅し、妹の帰りを待った。早くセックスしたくてたまらない。安全日の時はいつもこうだ。完全に妊娠しないとは言えないが、妹と生で出来るのはこの時しかない。

「ただいま」

妹の声がして俺は待ちきれずに玄関へ向かう。が、そこに別の人間がいて俺は驚いた。困ったような顔で俯く妹の横に同じくらいの年頃の少女が立っている。くせのない髪を肩まで伸ばした中々の美少女だ。

「ええ、と……いらつしやい」

間抜けな声で挨拶してしまう。妹はおずおずと隣の少女を見ながら俺に紹介する。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。この子は私のクラスメイトで△△佳代子ちゃんっていうの」

「初めまして、お兄さん」

佳代子という少女が頭を下げる。俺は事情が呑み込めないまま彼女を家にした。そして居間に座った妹から今日学校であったことを聞かされる。

「ねえ、明美ちゃん、ちよつといい？」

給食を終えた昼休み、妹は佳代子に声を掛けられた。佳代子は妹を人気がない校舎の裏に連れて行き、いきなりこう切り出した。

「昨日、旧校舎にいたでしょ？」

妹は心臓が止まるかと思うくらい驚いた。しばらく何も言えずにいると、佳代子はさらに続ける。

「私、見たの。その……明美ちゃんがセックスしてるところ。お兄ちゃん、って言ってたよね。あれ、本当に明美ちゃんのお兄ちゃんなの？」

完全に見られていた。妹は誤魔化すのは無理だと思い、正直に話し

た。そして他の人には言わないで、と頼んだ。

「うん、言わないよ。その代わりお願いがあるの。明美ちゃんのお兄さんに合わせてくれないかな」

そういうわけで妹は佳代子を家に連れてきたわけだった。まさか昨日のセックスを見られていたとは。俺以外にもあの板の外れる箇所を見つけた人間がいたことはそう驚きではない。誰にでも機会はあったろう。しかし授業の時間にあそこに入り込んでいる生徒がいるとは思いつかなかった。

「で、佳代子ちゃんは俺に何の用かな？妹とセックスしているのを責める気かい？」

目の前のジュースに手を付けることもなくじつとこちらを見つめる佳代子に尋ねる。佳代子はゆっくりと首を振り、

「いえ。昨日見た限り明美ちゃんはお兄さんとセックスするのを嫌がっているようじゃなかったですし、お二人が愛し合うことに口をはさむ気はないです。そんな資格もないです」

「じゃあ……」

「あのお聞きしたいことがあって。……兄弟でセックスしても、愛し合ってもいいんですか？」

「いい。俺はそう思ってるし、実際に明美を愛している」  
きっぱりと俺が言うと、佳代子はふう、とため息を吐く。

「実は……私にもお兄ちゃんがいて……最近口説かれたんです。私とその……恋人になってほしいって」

「ふうん、まあ同じ立場の人間として理解できるよ。佳代子ちゃんは可愛いし、ずっと一緒にいれば妹としてじゃなく女性として好きになることもあるだろうね」

「でも兄妹でそういうの……やっぱり変じゃないですか。私、びつくりしちゃって」

「それも分かるよ。ずっと兄として接してきたんだからね。明美も最初の頃はそうだった。兄妹で愛し合うなんておかしいって、随分拒絶されたよ」

「お兄ちゃん、恥ずかしいからあんまり言わないで」

「聞いたかい、佳代子ちゃん？明美は近親相姦を嫌がってたことが恥ずかしいって言ってるんだ。それくらい俺と愛し合うことが当たり前になってるんだよ」

「でもやつぱり……いけないことなんじゃないですか？兄妹でそういうことをするのは」

「どうしていけないんだい？」

「だ、だって……家族でそういうことをするのは」

「世間がいけないって言った？学校でそう習った？」

「習いはしませんけど、じよ、常識として……」

『常識とは18歳までに身に付けた偏見のコレクションのことをいう』、これはアインシュタインの言葉だけど、まあさすがにこじつけすぎかな。確かに近親相姦をタブーとするのは世界共通の認識だけどね。その根拠は主に近親間で子供を作った場合、障害を持つ子が生まれるリスクが高いということなんだ。これは昔明美にも話したけど、詳しい話は割愛しよう。とにかくそういう理由で近親間の結婚はほぼ何処の国でも認められていない。でもね、家族同士が愛し合っているといけないという決まりはないんだ。少なくとも日本には近親相姦そのものを禁止する法律はない」

「それでも普通は家族でそういうことは……」

「大半はしない、だろうね。でもそれは家族だから、ではなくて単に男と女として相手をそういう風に思えないからじゃないかな。他人同士だって誰とでもセックスするわけじゃなくて好きになった相手とするわけでしょ？レイプや売春は別として。好きになった相手が家族だった。近親相姦というのはただそれだけのことだ。避妊をした上での近親相姦がなぜいけないのか。それに明確に答えられる人はいるのかな？俺は明美を愛しているし、ずっと大切にするつもりだ。それを否定はさせない。誰であっても」

「お兄ちゃん……」

俺の言葉に妹が顔を赤くしてこちらを見つめる。

「明美、もう佳代子ちゃんは知ってるんだから遠慮することはない。」

服を脱ぎなさい」

「お兄ちゃん、でも……」

「ちよ、ちよつと待つてください！そんな」

「近親相姦がどんなに素晴らしいかお友達に教えてあげるんだ明美」

「はい」

妹が頷き、服に手をかける。

「明美ちゃん！」

佳代子が慌てて止めようとする。しかし俺はその佳代子の腕を掴み、それを制止する。

「ダメだよ、よく見るんだ佳代子ちゃん。近親相姦がどんなに気持ちいいか、妹が兄に犯されるといことがどういうものなのか。そして妹を犯す兄の覚悟を」

「ああ……」

妹が友達の前で全裸になる。目で合図すると、妹は少しためらいながらもいつものセリフを口にする。

「お兄ちゃん、今日も私をめちゃくちゃに犯してください」

「あ、明美ちゃん!？」

耳を疑うような妹のセリフに佳代子が絶句する。

「俺と明美はもうただの兄妹じゃないんだ。明美、佳代子ちゃんに教えてあげなさい。自分がお兄ちゃんの何なのか」

「佳代ちゃん、私はね、お兄ちゃんの肉奴隷なの。お兄ちゃんに犯されるためだけの肉便器なんだよ」

「明美ちゃん!?!そんな……」

「明美が俺の肉奴隷になったのは小学4年生のときだ。しかも明美は自分の意思で俺の肉奴隷になると決心したんだよ」

「う、嘘……」

「本当だよ、佳代ちゃん。私は自分の意思でお兄ちゃんの肉奴隷になるって誓ったの。お兄ちゃんに犯されるためだけに生きるって決めたの。それからずっとほぼ毎日セックスしてるんだ。近親相姦ってね、すごく気持ちいいんだよ。私、今本当に幸せなんだ」

「そんな……いや……」

「勿論最初からここまで堕ちてはくれなかったよ。何度も何度も真剣に口説いたんだ。俺がどれだけ明美を愛しているか。俺の気持ちと決意を伝えた。徐々に性の快感に目覚めさせて、初めてセックスするまで半年かけたよ。まだ明美は子供だったし乱暴なことは出来なかったからね。それでも九歳で初体験は大変だったろうけど」

「本当だよ。すっごく痛かったんだから」

「でもすぐに気持ちよくなったろ？三回目のセックスでいったもんな」

「もう。その後もしばらくは痛かったんだよ」

「分かるかい、佳代子ちゃん？俺は一人の男として明美という女の子に求愛したんだ。それが兄妹という関係だっただけだ。他人の女性にプロポーズすること、明美に肉奴隷になるようお願いすることは同じなんだ。相手の気持ち次第。俺という男が嫌いならプロポーズを断ればいい。俺の気持ちに応えられないなら肉奴隷になるのを拒めばいい。選択するのは女性の方だ。無論俺の気持ちに応えてくれるよう説得はしたよ。それこそ必死にね。最初は強引に肉体関係を迫った。近親相姦の気持ちよさを知ってもらいたかったから。でも普通にプロポーズをする時でも男は必死に相手の女性を口説くだろ？自分を好きになってもらえるよう努力すると思うよ。俺のやり方は普通ではなかったけど、明美を愛している気持ちに嘘は無かった。今もね。明美を肉奴隷にした責任はずっと背負っていく覚悟がある。法的に結婚できなくてもずっと一緒にいられるよう努力するつもりだ」

「お兄ちゃん……ありがとう」

「本当に……いいんですか？兄妹で愛し合っても」

「いいさ。大事なのはお互いの気持ちだ。佳代子ちゃんはお兄ちゃんが嫌いなのかい？」

「い、いえ。お兄ちゃんは優しいですし……好きですけど」

「だよ。じゃなきゃ悩んだりしないよね。あとはお兄ちゃんの覚悟だ。佳代子ちゃんを恋人にしたいというのなら、これから君をずっ

と愛していく覚悟がなきやだめだ。一時的な性欲を満たすだけというのでは幸せになれないからね。お互いが一時の肉体関係だと割り切ってるならいいけど」

「そんな……そんな風には考えられません」

「恋人としてこの先も一緒にいたいのならお兄ちゃんにその覚悟があるか確かめた方がいい。じゃないと佳代子ちゃんが不幸になるよ」

「は、はい」

「でもお互いがその覚悟を持って結ばれるのなら、素晴らしい幸せが待っているよ。今からそれを見せてあげる」

俺はそう言って全裸になり、妹の前に立った。妹は黙って跪き、佳代子に見える角度で俺のペニスを銜える。

「きやつー！」

「これがフェラチオだよ。セックスする前にこれを明美には徹底的に教え込んだ。よく見てて。今じゃプロも顔負けのテクニックだよ」玉袋を口に含み、裏筋を舐め上げて亀頭に舌を這わせる。興奮ではちきれそうなペニスをずっぽりと銜え込み、唇をすぼめながら頭を前後に動かす。たまらない快感に腰が抜けそうになる。

「気持ちいいよ、明美。佳代子ちゃん、よく見てて。これから口の中に射精するからね」

「く、口の中？」

「おおっ!!」

欲情が弾け、大量のザーメンが妹の口内に放たれる。最高の快感に酔いしれながら妹の頭を掴んで一滴残らず注ぎ込む。

「はあ……最高だ。明美の口便器は最高だよ。佳代子ちゃん、こっちに来て。明美、口の中のザーメンを見せてあげるんだ」

ゆっくりとペニスを抜き、佳代子を手招きする。震えて動かない佳代子に妹が近づき、口を開けてみせる。

「いやっー！」

「ほら、すごいだろう？明美の口の中、俺のザーメンでいっぱいだ。でもこれからが本番だよ」

妹が口を閉じ、舌を動かして俺のザーメンを味わう。驚きで目を見

聞く佳代子を見ながら俺はザーメンを飲むよう指示する。

「ぐくつ、ぐくつ」

「え？」

「分かる？ザーメンを飲んでるんだ。俺のザーメンを明美が飲んでるんだよ。この喉の音がたまらないんだ。最高に幸せな時間の一つだ」

「ああ……そんな」

ザーメンを全て飲み干した妹がもう一度口を開けて佳代子に見せる。間違いなく全てのザーメンが妹の胃に収められたのを見て、佳代子が涙目になる。

「そんな顔しないで、佳代ちゃん。私は喜んでお兄ちゃんのザーメンを飲んでるんだよ。私はお兄ちゃんの肉便器なんだから」

「いや、明美ちゃん。こんなの……こんなの変だよ」

「変じゃないよ。俺と明美は心の底から愛し合ってるんだ。二人で一つなんだよ。佳代子ちゃんに肉奴隷にまでなれとは言わないけど、本当にお兄ちゃんと愛し合うならフェラチオくらいはしてあげてほしいな」

「おちんちんを舐めるなんて嫌っ！」

「男はとつても気持ちいいんだよ。大丈夫、普段ちゃんと風呂に入つてれば汚くないから。俺はわざとおちんちんを洗わないようにしてるけどね。チンカスまで全部明美に綺麗にしてほしいから」

「お、おかしいです！お兄さんは変態です！明美ちゃんもおかしいよ！」

「まあ俺が変態なのは否定しないけど」

「そんなこと言わないで佳代ちゃん！私は望んでこうしてるの！お兄ちゃんの臭いおちんちんを綺麗にするのが喜びなの。佳代ちゃんは近親相姦の気持ちよさを知らないからそんなこと言うんだよ」

「明美ちゃん……」

「今から見せてあげるよ。佳代ちゃんは運がいい。今日は明美、安全日だからね。生でオマンコにザーメン注ぐところ見られるよ」

「い、いやっ！もう帰りますっ！」

「ダメだよ、ちゃんと見るんだ。お兄ちゃんの想いにどう応えるか相談に来たんだろう？それを最終的に決めるのは佳代子ちゃん自身だけど、お兄ちゃんに佳代子ちゃんをずっと大切にする覚悟があるなら、俺としては応えてあげて欲しい。同じ立場として佳代子ちゃんのお兄ちゃんの気持ちはよく分かるからね。そして近親相姦の先輩として、加代子ちゃんがお兄ちゃんと結ばれたらどんなに凄い快感が待っているか見せてあげる。よく明美の顔を見るんだ」

俺は妹を四つん這いにさせ、後ろからオマンコを貫くと体を起こして背面座位の恰好になる。兄と妹の結合部を見て佳代子が息を呑む。「ひっ！」

「ほら、よく見て。俺のおちんちん、明美のオマンコに根元まで嵌ってるだろう？これがセックスだよ。一般的なのは正常位だけど、今は佳代子ちゃんが見やすいようにこの体位でしてる。これから動くからね。明美がどんな顔するかよく見ててご覧」

「ああ……お兄ちゃん、恥ずかしいよお」

「いつも通り素直に感じるんだ。佳代子ちゃんにお兄ちゃんに犯されるのがどんなに気持ちいいか教えてあげるんだ」

「ああっ！」

下から激しく突き上げると、たちまち妹は嬌声を上げる。慣れ親しんだ、それでいて決して飽きることのない妹の膣内を擦り、快感に身を震わせる。

「ううっ！いいーほら見て、佳代子ちゃん！明美はどんな顔してる？」

「あ……ああ」

胸を揉まれ、妹がさらによがりまくる。クリトリスを指で摘むと、声がまた一オクターブ上がった。

「いひいっ!!み、見て！佳代ちゃん見て!!犯されてるの！お兄ちゃんに犯されてるの！気持ちいいっ!!近親相姦！凄く気持ちいいのっ!!」

「明美ちゃん……」

佳代子がとうとう泣き出した。性体験のない中一の少女にはあま

りにも刺激が強かったのだろう。それに反して妹はいつも以上に感じまくっている。小4の運動会の日、クラスメイトに見られていることを想像させながら犯した時も大層な乱れようだった。今は本当に友達に見られている。妹のマゾの本能が刺激されているのだろう。

「いいか!?友達に見られながらお兄ちゃんに犯されて気持ちいいか!?!」

「いいっ!気持ちいいっ!見られてるのにい!佳代ちゃんに見られてるのに!気持ちいい!!」

「明美ちゃん……」

泣きながらも佳代子の視線は俺たちが繋がっている股間へ向けられていた。やはり興味はあるのだろう。

「いくぞ!出すぞ!明美っ!」

「出してえっ!いやらしい明美の肉便器子宮をお兄ちゃんの熱いザーメンでパンパンに満たしてえっ!!」

「ああっ……明美ちゃん……なんていやらしい顔……」

「ああ——っ!!」

欲情の迸りが妹の子宮の奥を叩く。クラスメイトに目の前で見られながら、肉奴隷に堕ちた妹は膣内射精の快感に全身を震わせて絶頂を貪った。

## 幸せの伝播

「ああ……」

大量のザーメンを子宮にぶちまけられた妹が満足げな顔を向け、俺にキスをねだる。唇を重ねながら股間に手をやると、みっちりと結合したオマンコからザーメンが逆流している。視線をやると佳代子がそこを凝視していた。

「どう？妹の子宮に兄のザーメンがたつぷり流し込まれたのを見た感想は？明美の顔を見てごらん。ほら、こんなに満足そうだろう？俺も満足感でいっぱいだ。やっぱり中出し近親相姦は最高だからね」

「ほ、本当に中に出てる……」

「そうだよ。まあ安全日以外はコンドームを付けてるけどね。佳代子ちゃんもお兄ちゃんとセックスしても避妊はしなきゃダメだよ。いくら愛があっても中学生で妊娠したら周りがるさいからね。関係が続けられなくなる恐れもある」

「わ、私はまだセックスするなんて……」

「お兄ちゃんに口説かれてるんだろ？自分の経験からいって佳代子ちゃんがお兄ちゃんの恋人になることを受け入れたら、すぐにセックスをさせてほしいって言うはずだよ。いきなり入れるのはよくないけど、佳代子ちゃんの歳ならそこまで時間をかけなくても大丈夫だろうし、覚悟はしておいた方がいい。明美の時は小4だったから半年かけたけどね」

「だ、だから私はまだ……」

「勿論決めるのは佳代子ちゃんだからね。でも見たろう？明美の幸せそうな顔。お互いが愛し合っつての近親相姦は世界で一番気持ちいいセックスなんだよ。最初は痛いけどね。明美も大分痛がった。だから最初は乱暴にしないように、逸る気持ちは分かるけど優しくしてあげるようお兄ちゃんには伝えて」

「わ、私……ああ」

俺はもう佳代子が兄を受け入れるものとして話をしている。ここに相談に来た時点で、佳代子の気持ちはほぼ決まっていたと思う。俺

に会いに来たのは実際に近親相姦をすることがそういうものか確かめたかったのだろう。

「くれぐれもお兄ちゃんには言っておいてね。妹を恋人にするってことは相当の覚悟がいるよ、って。最高の快感を得る代わりに一生かけて重い責任を負う覚悟がね。佳代子ちゃんも少しでもお兄ちゃんとずっと一緒にいるのが嫌なら断った方がいい。兄妹で愛し合うのはお互いが覚悟を持つ必要があるんだ」

「私にはそんなこと言わなかったじゃない。もう強引にセックスするよう迫ってきて」

「俺も必死だったんだよ。他人のことなら冷静に言えるけどね。どうしてもお前に俺のものになってほしかったからな。後悔してるのか？」

「そんなわけないの知ってて聞かないで。お兄ちゃんの意地悪」

「明美ちゃん、本当にいいの？お兄ちゃんとセックスして……に、肉奴隷にまでなって本当に幸せなの？」

佳代子の言葉に妹が優しく微笑み、腰を上げて俺のペニスを抜いて彼女に近づく。

「見て佳代ちゃん。ほら、私のオマンコからお兄ちゃんのザーメンがいつぱい流れてるでしょ。さつきこれが私の子宮に思いつきり注がれたんだよ。その時の気持ちよさは言葉じゃ言い表せないくらい凄いの。お兄ちゃんに愛されることが実感できて、本当に幸せな気持ちになれるの」

「明美ちゃん……」

「最初は私も嫌だったし怖かったよ。でも恥ずかしい思いをすればするほどその後気持ちよくなれるってお兄ちゃんが言ったの。それは本当だった。私は小学生が普通は絶対しないような恥ずかしくていやらしいことをさせられたけど、そのおかげで普通の女の子が絶対味わえないような気持ちよさを感じられたの」

「そんなに……そんなに気持ちいいの？」

「そうだよ。私は自分でもおかしいと思うくらいいやらしくなっちゃったけど、佳代ちゃんのお兄ちゃんはお兄ちゃんほど変態

じやないだろうから、きつと気持ちいいだけで幸せになれるよ」

「ひどいな明美。お兄ちゃんを変態呼ばわりなんて」

「そうじゃない。佳代ちゃん見てて。お兄ちゃんがどんなに変態か見せてあげる」

妹はそう言つて俺の前に座つて口を開く。妹の意図に気づき俺は苦笑した。ペニスを妹の口に向け、佳代子に視線をやる。

「見ててね。明美がどんなにいやらしい存在になったのか見せてあげる」

「お兄ちゃんのせいでしょう」

そう言う妹の口に小便を出す。開けた口に小便が流し込まれるのを見て、佳代子が絶句する。

「あ、明美ちゃ……」

零れそうになる前にペニスを銜え、小便を飲み干していく妹に佳代子の顔色が変わる。全部飲んだ後亀頭を舐め尿道に吸い付く妹。俺は妹の頭を撫でながら佳代子に微笑みかける。

「すごいだろう？この三年間、俺のおしっこはみんな明美に飲ませてるんだ」

「ううっ」

佳代子が口を手で押さえる。あまりの衝撃で気分が悪くなったのかもしれない。俺は急いで新聞紙を取りに行き、佳代子の前に敷いた。直後に佳代子が嘔吐する。

「大丈夫？佳代ちゃん」

妹が佳代子の背中をさする。少し吐いただけで落ち着いたか、佳代子が口を押えたまま頷く。

「ご、ごめんなさい」

「気にしなくていいよ。少しショックが強かったかな」

新聞紙を片付けながら少し申し訳ない気持ちになつて言う。

「びっくりしたよね。でもこれが今の私なの。お兄ちゃんの完全な肉便器。嫌々じゃなくて、自分で望んでおしっこ飲んでるんだよ」

「そんな……こんなことおかしいよ」

「そうだね。普通の感覚だとおかしいんだろうね。でも私は、私と

お兄ちゃんは普通じゃないの。お兄ちゃんに普通じゃない女の子にされちゃったの。だけどそれを後悔はしてないんだよ。私、本当に幸せなの。お兄ちゃんの肉奴隷になって、毎日犯されて、最高に幸せなの。それだけは信じて」

「明美ちゃん……」

「自分で言うのもなんだけど、俺と明美の関係はあまりにも異常だといっているだろう。近親相姦をしている家族はそこその数いると思うけど、俺ほど幼い時から妹をここまで調教した人間は少ないだろう。小学生でここまで堕ちた女の子もそうはいないよ、きつと」

「お兄ちゃんが異常だから私もこんなになっちゃったんだもん」

「情熱と言ってほしいな。あれだけ真剣に何度も口説いたんだ。お前をここまで堕とすのにお兄ちゃんは全身全霊を込めたんだよ。それだけの覚悟も持ってね」

「それは分かっているけど、当時は本当に戸惑ったんだよ。お兄ちゃん、怖いくらいだったし」

「まあそうだよな。九歳の小学生に肉奴隷になれなんて自分でも狂っていると思うよ。だけどそれだけの熱量を込めて口説いたから今の俺たちがあるんだ。俺は後悔してないし、自分でもよくやったと思うよ」

「私のお兄ちゃんもそんな風に言ってくるのかな……」

「佳代ちゃんのお兄ちゃんはお兄ちゃんほどおかしくはないだろうからそんなことは言わないと思うよ。恋人になってほしいって言われたんでしょ？」

「そうだけど……」

「友達の前だからって今日は随分いじめてくるな、明美。お兄ちゃんは悲しいよ」

「佳代ちゃんと話してたら、改めて私って異常なんだって思っちゃったよ。お兄ちゃんがすごい変態だったことも改めて分かった」

「その変態に犯されてよがりまくっているくせに」

「だからそうしたのはお兄ちゃんですよ」

「それでも……明美ちゃんは幸せなの？」

「幸せだよ。もうお兄ちゃんのおちんちんなしでは生きられないの。悔しいけどお兄ちゃんの勝ち。私、お兄ちゃんの肉奴隷になれて本当に幸せだって思っちゃってるもん」

「ありがとう、明美」

「私みたいになることはないよ、佳代ちゃん。だけどお兄ちゃんの気持ちに応えるかはちゃんと考えてあげて。お兄ちゃんが真剣ならきつと幸せになれるよ。少なくとも気持ちいいことは間違いないから」

「分かった。よく考えて、お兄ちゃんにも気持ち確かめて返事する」

「それがいい。じっくり考えて答えを出しなさい。あまり待たせるとお兄ちゃんが暴走しちゃうかもしれないけどね」

「うちのお兄ちゃんみたいな変態じゃないことを祈ってるよ、佳代ちゃん」

「マジでへこみそうだからやめてくれ」

そう言つて笑いあう俺たちを見て、佳代子もようやく笑みを見せた。そして俺たちに礼を言い、彼女は兄の待つ家へ帰っていった。

「佳代子ちゃん、どうするかな」

「きつとお兄ちゃんの気持ちに응えるところよ」

「そうだな」

妹を愛撫しながら俺もそれを半ば確信していた。もう一組の近親相姦兄妹がもうすぐ生まれるのだ。その一助が出来たことは歓びでもあり、不安でもあった。佳代子の兄が俺のようにずっと妹を愛していく覚悟があるのか。もしなければ彼女を不幸にしてしまう可能性もある。

「どうしたの？お兄ちゃん」

胸を揉む手が止まっているのに妹が怪訝な顔をする。

「いや、佳代子ちゃんとお兄ちゃんが上手くいけばいいな、ってな」

「うん。近親相姦ってやっぱ普通じゃないもんね」

「俺たちはもう完全に一つになれたって確信してるけど、ここまですまくいくことは中々ないかもしれないからな」

「私たちが心配してもしようがないよ」

「そうだな。じゃあもう一回していいか？」

「ダメって言ってもするでしょ？ダメじゃないけど」

「だよな。どこに出してほしい？」

「今日は子宮に全部出すんでしょ？」

「さすがよく分かってるな。ご褒美に好きな体位でしてあげる。どれがいい？」

「お兄ちゃんがしたい体位でいいよ」

「じゃあ騎乗位だ。自分で腰を振ってザーメンを搾り取って」

「本当に変態なんだから」

そう言いながら妹は寝そべった俺の上に跨り、ペニスを握って自分のオマンコへ沈めていく。

「あああつ!!」

俺の上で腰を振り、妹が嬌声を上げる。快感に歪む妹の顔を見ながら、興奮が高まっていく。

「明美っー」

腰を掴み、思いきり腰を突き上げる。同時に熱い白濁液が妹の中へ飛沫を上げた。

「お兄ちゃあん!!」

体を反らせ、妹が絶頂を迎える。最高の快感に包まがら、身も心も一つになった兄妹は全裸のまま硬直して幸せを噛み締めた。

数日後、妹は再び佳代子に呼び出されて話をされた。それは以下のような内容だった。

「あのね、明美ちゃん」

「うん」

「昨日……しちやったの。セックス」

「え!?!お兄ちゃん?!」

「しっ!声大きいよ、明美ちゃん」

「ご、ごめん。ちよつと歩き方がおかしいと思ったんだ。痛いんでしょ?」

「うん、痛いとは明美ちゃんのお兄ちゃんから聞いてたから覚悟はしてたつもりだったんだけど、想像以上だった。小4でよく我慢できたね、明美ちゃん」

「我慢なんて出来なかったよ。体が裂けるかと思ったもん。痛い痛いって言ってたのにお兄ちゃんやめてくれなくて。でも何回かするうちに痛くなくなってきた、気持ちいいだけになったけど」

「やっぱり痛くなくなるの? 私これからもずっと痛いのかと思って怖い」

「大丈夫だよ。何回かすれば痛みはなくなるよ。お兄ちゃんは乱暴にしなかった?」

「うん、明美ちゃんとお兄ちゃんのことを話したら、優しくするって言うってくれて。無理やりにはされなかったけど」

「私のこと話したんだ。恥ずかしいなあ」

「誰にも話さないって約束してくれたから大丈夫だよ。明美ちゃんのお兄ちゃんのこと羨ましがってた。本当はもつと前に告白したかったみたい、私に」

「佳代ちゃんのお兄ちゃんも結構変態なのかもね」

「そうかも。明美ちゃんのお兄ちゃんに会いたいわって言ってた」

「ええ? やめた方がいいと思うなあ。お兄ちゃんから悪い影響受けるかも」

「私、肉奴隷にされちゃうのかな?」

「それは佳代ちゃんが決めることだよ。無理やりされるのはダメ。うちのお兄ちゃんもそう言うと思うよ」

「そう……だよね」

そんなわけでその翌日、俺は本当に佳代子を通じて彼女の兄から会いたいという伝言を受けた。同じ妹を愛した者として興味を引かれた俺はその誘いを受けることにし、近所の喫茶店で待ち合わせる約束

をした。

「初めまして、佳代子の兄の惚太郎です」

先に店に来ていた佳代子の兄は俺が来るとすぐ立ち上がり頭を下げた。お互いの妹通じて当日来ていく服装を教えていたので迷わず会えることが出来た。

「初めまして」

俺も向かいの席に立って頭を下げる。惚太郎は俺より一つ下の高一でしかも同じ市内の高校に通っていた。隣の学校と言ってもいい。悔しいが俺よりハンサムだ。しかし丁寧な挨拶の仕方に好感を持った。

「お会いできて光栄です」

席に座るなり、身を乗り出しながら惚太郎が言う。

「そんな、大げさだよ」

「いえ、僕はお兄さんを尊敬しています。世間的にはええばれることではないでしょうが、同じ妹を愛するものとして」

声を潜めて惚太郎が言う。隣の席には誰もいないが、人に聞かれていい話でもない。その気遣いにますます好感を持った。

「だから大げさだよ。妹を犯して喜んでる変態さ。佳代子ちゃんもそう言ってたろ?」

「そんな。あの……先輩とお呼びしても?」

「構わないよ。いろいろな意味で先輩なのは確かだし」

俺は苦笑しながら言う。

「確かに妹に手を出すというのは一般的には許されないこと何でしょうが、人を愛するのに家屋も他人も無いと思うんです。僕は本当に佳代子を愛していますし、こうなったことを後悔もしてません」

「そうだね。俺もだよ」

「先輩は明美ちゃんが小学生の時から、しかも4年生の時から真剣に明美ちゃんを愛し、その……肉奴隷にまで堕としたと聞いて感動しました。僕も佳代子が小学生の時から好きだったんですが、中々言い出せなくて」

「それが普通だろう。俺が異常なんだよ。九歳の妹に自分の肉奴隷

になってくれなんてまともな人間の言うことじゃない。あいつは小4でセックスは勿論、フェラチオもアナルセックスも全部経験した。そんな小4なんてまずいないだろう」

「でもそれだけの覚悟をもって明美ちゃんを口説いたんですよ？」

「勿論だ。佳代子ちゃんにも言ったけど、妹を愛するというのはそれだけの責任を負う覚悟がいる。俺はずっと明美と一緒にいるために全てを捧げるつもりだよ」

「俺はそこまで考えられませんでした。ただ佳代子が愛しくて……今考えるとただ単に性欲のはけ口として妹を見ていたんじゃないかという気がします」

「俺たちの歳ならそれも普通だろう。俺も明美を肉奴隷にした年は狂ったようにセックスしてたよ」

「でも先輩の話を佳代子から聞いて、ちゃんと妹を愛する覚悟を持たなきゃいけないんだと思いました。だからこないだ初めてセックスした時も焦らず優しくしてやれたと思います」

「それが大事だよ。特に最初は痛いからね。乱暴にしてセックスへの恐怖感を植え付けてしまったらその後が上手くいかなくなる。明美の時も大変だったよ。二回目のセックスをどうしても嫌がったらどうしようって思ってた」

「優しくしてもやあっぱり痛いですよ。佳代子もかなり痛がってました」

「まあ最初は誰だってそうだからね。妹には悪いけど最初の何回かは我慢してもらうしかない」

「先輩は小学生の明美ちゃんをちゃんと墮としたんだからすごいですよ」

「必死だったけど。明美にしてみれば根負けだったんじゃないかな？とにかく何度も説得して口説きまくったからね」

「その情熱がすごいです。俺ももっと早く佳代子に告白しておけばよかったです」

「今になって打ち明けたのはどうして？」

「佳代子が「ラブレター」貰ったって聞いて焦ったんです。恋人が出来たらどうしようって」

「佳代子ちゃん可愛いからね。明美ももう何回もラブレター貰ってるよ。佳代子ちゃんは断ったんだね？」

「そう言っていました。別のクラスのほとんど話したこともない男子だったらしくて」

「早く告白してよかったね。彼氏が出来た後じゃ口説くのも大変になる」

「はい。先輩は安心ですよ。明美ちゃんがラブレター貰ってもOKするわけじゃないですから」

「断る理由を説明できないってぼやいてたけどね」

「お兄ちゃんと愛し合ってるから、とは言えませんが」

「いつそ世界中に公表したい気もするよ。誰も明美に近づかないように」

「そう出来たらいいですけど、実際は……」

「ああ。近親相姦はタブーだからね。他人に知られるわけにはいかない。だから惚太郎君、安全日以外はちゃんと避妊しなきゃダメだよ。中学生で妊娠したら周りがよってたかって引き離そうとするからね」

「分かってます。佳代子から先輩の言葉を聞いて、改めて気を付けようと思いました」

「妹の心も体も自分のものにしたんだから、妹を幸せにする責任が俺たちにはある。二人で幸せになることが何より大切なんだ。お互い妹を幸せにするために頑張ろう」

「はい。それで先輩が明美ちゃんを調教した話を聞きたいんですけど」

「うーん、お勧めはしないな。明美にも怒られそうだし。俺のやってきたことは結構鬼畜だからね。同じことをしたら佳代子ちゃんが可哀そうだよ」

「そのまま真似するとは言いませんが、明美ちゃんは自分が幸せだって言ってるんでしょう？佳代子にもそう思ってもらいたいです」

から」

「それじゃまあ話すけど、俺はセックスまで半年かけたからね。無理はさせちやだめだよ」

「はい」

そう言いながら惣太郎は目を輝かせ俺の調教の歴史に耳を傾けた。

## 二人の肉奴隷 ―ザーメン味比べ

それから妹を通して佳代子と惣一郎の状況は逐一知らされた。惣一郎が妹を通して俺に伝えたがっているらしい。フェラチオで初めてザーメンを全部飲んだとか、アナルセックスを初体験したとか、佳代子は恥ずかしそうに学校で妹に報告するらしい。そして佳代子が兄と結ばれてしばらくしたある日、彼女はついに妹にこう報告した。

「ついに来ちゃったよ、明美ちゃん。私に肉奴隷になってほしいってお兄ちゃんが……。はつきりとは言わなかったけど、おしっこも飲んでほしいみたい」

「ああ、やっぱり。ごめんね佳代ちゃん。うちのお兄ちゃんのせいで。あれだけ変な事教えないでって言ったのに」

「うちのお兄ちゃん、明美ちゃんのお兄ちゃんをかなり尊敬してるみたいだから」

「もう、あんな変態のお兄ちゃんを真似したらダメなのに」

「その変態のお兄ちゃんの肉奴隷になって悦んでる明美ちゃんが言っても説得力ないよ」

「そうだね。私はもう完全におかしくなっちゃってるから。でも一般的な常識というか正常な感覚はあるんだよ。お兄ちゃんはあるなに変態的なことするくせにそういうところはちゃんと忘れないようにするの」

「うちのお兄ちゃんもそれが凄いつて言ってた。学校での明美ちゃんを見てると、とても毎日実のお兄ちゃんと愛し合ってるようには見えないもん。調教の仕方を学びたいって」

「そんなの真似したら佳代ちゃんも私と同じになっちゃうよ。私は自分がおかしいのは自覚してるから、他の人が自分みたいになるのは可哀そうって思うの」

「すごいよね。他人から見たら可哀そうだっと思える状況に自分になってるって自覚してるのに、それでも明美ちゃんは幸せだっ感じてるんでしょ?」

「そうなの。だって毎日ザーメンだけじゃなくておしっこも飲んでるんだよ？うんちは浣腸されて専用の洗面器にしかさせてもらえないし。普通の子が聞いたら倒れるか泣き出しちゃうよね。でも私は本当に幸せだって心から思ってる。お兄ちゃんの肉奴隷になったことを少しも後悔してないの。変だよね」

「明美ちゃんのお兄ちゃんのお兄ちゃんのお兄ちゃんが憧れるのも分かるかも」

「そんなこと言うようじゃ大分毒されてきてるね、佳代ちゃんも。この間初めて浣腸されたんでしょ？」

「うん。私にもね、専用の洗面器お兄ちゃんが用意したの。本当に恥ずかしかった。お兄ちゃんの前でうんちするなんて」

「分かるよ。私も最初は本当に嫌で暴れたもん。私なんてセックスする前に浣腸教えられたんだよ。小4の時からうんちするのに家のトイレ使ったことほとんどないもん。ママが休みの日にどうしてもしたくなつた時だけ。それもお兄ちゃんの許可がいるしね」

「私も肉奴隷になったらそうなるのかあ」

「でも強制されたわけじゃないんでしょ？」

「うん、うちのお兄ちゃんは明美ちゃんのお兄ちゃんを尊敬してるから、明美ちゃんの時と同じで私に選択しろって言った」

「私も悩んだよ。三日間何もエッチなことしないで私に決めろって。肉奴隷になるか、もう一切エッチなことはしないか。究極の二択？ずるいよね。それまでさんざんセックスして近親相姦の気持ちよさを教え込んでおいて、もうエッチしないとかわねたら、肉奴隷になるって言うしかないじゃない」

「その時は本当に後悔しなかった？」

「正直迷いはあったよ。お兄ちゃんとのセックスがあんまり気持ちよくて、このままいつたらどうなっちゃうんだらうって。でもお兄ちゃんが何も考えずに快感を受け止めろって言うから決意したの。それで今はとっても幸せ」

「ご馳走様。……私も肉奴隷になったら幸せになれるかな」

「佳代ちゃんのお兄ちゃんうちのお兄ちゃんと同じくらい佳代

ちやんを愛してくれているなら、きつとなれると思うよ。正直お勧めはしないけど。私の経験上、肉奴隷になるって誓ったら、お兄ちゃん本当に時間の許す限りセックスしてくるよ。私も毎日失神うるまで犯されたもん」

「ちよつと怖いなあ。でももう痛くはないし」

「近親相姦、気持ちいいでしょ？」

「うん、すごく。明美ちゃんの言った通りだった」

「私は肉奴隷になった時まだ初潮来てなかったからね。毎日中出しだったから凄かったよ」

「生でしたのはまだ数回だけど、確かに直接ザーメン子宮に注がれると凄いよね」

「私がおかしくなるのも分かるでしょ？九歳でセックスの快感を徹底的に教え込まれちゃったんだから」

「お兄ちゃんまだ言ってるの。私が小学生の時に口説けばよかったって」

「お互い変態のお兄ちゃんを持って大変だよ。それでどうするの？肉奴隷になるの？」

「うーん、私もまだ迷ってるんだけど」

そう言いながらもうつとりとした表情をする佳代子を見て、妹は間違いない彼女が肉奴隷になることを誓うのだろうと確信した。はたしてその二日後、妹は佳代子から兄の肉奴隷になったことを報告されたのだった。

「順調に佳代子ちゃんと愛し合ってるみたいだね。おめでどう」

佳代子が惚太郎の肉奴隷になったことを聞いた数日後、俺はまた喫茶店で当の本人と会っていた。惚太郎から会いたいと言われたのだ。

「ありがとうございます。実は昨日、初めて佳代子がおしっこを飲んでくれたんですよ」

「そこまでやらせたのかい？また明美に怒られそうだなあ」

「先輩の言っていた通り、最高ですね、妹におしっこ飲ませるのは」

「だろう？妹の口便器の気持ちよさを知ってしまったら、もうトイレなんか使えないよ。佳代子ちゃんには申し訳ないけど」

「佳代子には明美ちゃんのように幸せだと思ってもらえるよう頑張ります」

「そうだね。で、今日はその報告？」

「いえ、実は今度の週末、うち両親がいないんですよ。それでですね」

惣太郎が身を乗り出して囁くように言う。

「明美ちゃんと二人でうちに泊まりに来ませんか？」

「え？」

「その……お互いの近親相姦を見せ合いたいなって。先輩のおかげで佳代子も肉奴隷になる決心をしてくれたので、お礼といふかなんというか。勿論先輩が嫌なら断ってくださいっても……」

「惣太郎君も俺に負けず劣らずの鬼畜だね。お互いが妹と繋がっているところを見せ合うわけか。面白いかもしれないな」

「じゃあ……」

「どうせ見せ合うならいろんなことをしたいね。どこまでやるか計画を立てようか」

「はい」

こうして俺たちは妹たちの知らないところで恥辱にまみれた近親相姦合宿の計画を話し合った。

「それじゃ先方さんに失礼のないようにね」

母が出がけにそう言う。今日は土曜日。学校から帰ったら惣太郎の家に行く予定だ。共通の友達の手誘いで泊まりに行くと言った時は母は少し怪訝な顔をしたが、二人一緒なら却って安心だと思ったようだ。俺たちはそれぞれ学校が終わると一度帰宅し、前日買っておいたお土産を持って惣太郎の家に向かった。

「佳代ちゃんに聞いたよ。今日他に誰もいないんですよ？エッチするつもりなんですよ」

「そうだよ。今日から明日にかけて近親相姦合宿だ」

「また変態的な事考えてるの?」

「想像に任せる。嫌なら帰るか?」

「佳代ちゃん家に泊まりに行くって聞いたときから覚悟はできてるよ。あ私も佳代ちゃんもお兄ちゃんの肉奴隷だからね」

「とつても素敵な合宿になるよ。お兄ちゃんたちに任せておけ」

「はあ……私やつぱりおかしくなっちゃったんだなあ。期待しちやってるんだもん」

「期待に応えてあげるよ」

そんな会話をするうち惣太郎の家に着いた。チャイムを鳴らすと佳代子が迎えてくれ、俺たちは居間に通された。お土産の菓子を渡してそれを食べながら少し他愛のない話をする。

「それじゃ始めようか。二人とも、服を脱ぎなさい」

俺の言葉に妹と佳代子が顔を赤らめる。お互い自分の兄以外に裸を見せるのは初めてだ。少しためらいながらも二人の妹は兄が凝視する前で服を脱ぐ。初めて見る佳代子の裸体に俺は見入った。胸は妹より少し小ぶりだが、スタイルが抜群に良い。学校でもモテるのだろうな、と思った。

「明美ちゃんは胸が大きくて可愛いですね。その……失礼かもしれませんが女性らしさが佳代子より感じられて。長い時間先輩に愛されたせいでしょうね」

「いや、恥ずかしい」

妹が身をよじる。他人に裸をじっくり見られてかなり恥ずかしくがっている。それは佳代子も同じだろう。妹の新鮮な恥じらいの表情が見られて俺は満足する。

「佳代子ちゃんは抜群のスタイルだね。モデルにスカウトされるんじゃないか?」

「あ、あまり見ないでください」

「それは無理だよ佳代子。二人ともとっても可愛いもの。どうしたって見入っちゃおうよ」

「お兄ちゃんのバカあ」

俺たちは愛しい妹たちの裸体をじっくり鑑賞した後、二人を四つん

這いにさせる。コンドームを付けて後ろから自分の妹を貫くと、そのまま体を起こす。

「あぁっ！」

背面座位で繋がった二組の兄妹が向かい合わせになる。妹の胸を揉みながら前を見ると、惣太郎に貫かれた佳代子の肢体が目映る。この体位で犯されている姿を正面から直に見ることは普段ないので、かなり興奮する。惣太郎も俺と同じく妹の胸を揉みながら激しく子宮を突き上げていた。

「あぁんっ！お、お兄ちゃ……」

「どうだ？友達と向かい合って犯されながらその友達の兄に見られる気分は？」

「いやぁ、恥ずかしい」

「見てごらん、佳代子ちゃんの蕩け切った顔。お前もあんないやらしい顔を惣太郎君に見せてるんだな」

「いや、言わないで。あぁっ！深いっ!!」

「さすが先輩、言葉責めも半端じゃないですね。佳代子、お前も今あんな顔してるんだな？明美ちゃんみたいな雌犬の顔を」

「やぁっ！そんな……そんなこと」

佳代子が顔を真っ赤にして首を振る。

「ふふ、いいんだよ佳代子ちゃん。恥ずかしがって、もつと恥ずかしがって。恥ずかしい思いをすればするほど気持ちよくなれるんだ。なあ明美？」

「し、知らない！……ダメ、お兄ちゃん、もつとゆっくり」

「嘘はいけないな。小4の時から嫌というほど実感してきたろ？中一でこんないやらしい思いをしてきたのはお前くらいだよ、きつと」

「それはお兄ちゃんが……んっ!!」

「あ、お兄ちゃん、ダメ！き、きちやう」

二人の妹が兄の責めにあえぎ、絶頂を迎えようとしている。俺と惣太郎はさらに腰の動きを速め、妹たちを天国へ連れて行こうと必死になる。

「おうっ！明美っ!!」

「佳代子！俺も!!」

ひとときわ大きく腰を突き上げ、妹の最奥を突く。コンドームの中でザーメンの爆発が起こる。俺たち四人が絶頂に達したのはほぼ同時だった。

「ああ——っ!!」

二人の妹が絶頂の叫びをハモらせる。妹の腰を掴み、射精の快感に酔う。妹と佳代子がぐったりと兄に体を預け、二人の兄はそれぞれ妹の唇を吸って頭を撫でた。

「さ、抜くよ」

妹の中からペニスを抜き、中のザーメンが零れないよう慎重にコンドームを外す。たつぷりと白濁液を溜めこんだコンドームを持ち、俺と惚太郎はお互い相手の妹のところへそれを持っていく。

「えっ？」

当然自分の兄のザーメンを飲まされると思っていた妹たちがぎよとんとした顔をする。

「飲むんだ。明美は惚太郎の、佳代子ちゃんは俺のザーメンをね。

友達のお兄ちゃんを味わいなさい」

「そ、そんな」

これが喫茶店で打ち合わせた合宿の計画の一つ目だ。少し困惑しながらも妹と佳代子は素直に口を開ける。俺はコンドームを逆さにし、出したばかりの自分のザーメンを佳代子の口内に流し込んだ。妹以外に自分のザーメンを飲ませるのは初めてだ。向かい側では惚太郎がやはり自分のザーメンを明美の口に流し込んでいる。妹が俺以外の男のザーメンを飲むのも初めてだ。惚太郎と佳代子もそうのはずだ。異様な興奮が襲ってくる。

「よく味わって」

佳代子も明美と同じフェラチオのルールを決められていると惚太郎から聞いた。佳代子が口の中で舌を動かし、鼻で呼吸をする。明美も同じようにしているはずだ。俺と惚太郎はくちゅくちゅという淫らな音を立ててザーメンを味わう妹たちを見て感動し、目を合わせて

頷く。

「飲んでいいよ」

妹と佳代子が喉を鳴らしザーメンを飲み干していく。最高の調べの共演に胸が熱くなる。お互いの友達の兄のザーメンを、実の兄に見られながら飲み干す妹の姿にペニスが硬くなる。

「どうだった？お兄ちゃんのザーメンと比べて味は？」

「分かんないよお、同じように苦いし」

「そうだよね」

「おいおい、毎日飲んでるお兄ちゃんのザーメンと別の人のザーメンお味の違いが分からないのか？」

「少しは違うと思うけど……」

「よし、じゃあテストしてやる」

「え？」

俺と惚太郎はガチガチに勃起したペニスを妹たちの前に差し出した。俺は佳代子に、惚太郎は明美に。

「お、お兄ちゃん!？」

「友達のお兄ちゃんのおちんちんをしゃぶるんだ」

「ええ!？」

戸惑いながら顔を見合わせた明美と佳代子のはあ、とため息をついて口を開く。俺は佳代子の口内にペニスを突っ込み、頭を掴んで前後に動かした。隣では惚太郎が明美に同じことをしている。

「唇をすぼめて俺のおちんちんの味を感じて」

もう何回もフェラをしてるであろう佳代子の口奉仕は妹ほどではないものの中々上手だ。温かい口内の感触に思わずまた射精したくなるが、ここで出すわけにはいかない。ぐっと堪えてゆっくりペニスを引き抜く。

「うわっ！明美ちゃんのフェラ、上手すぎでしょ！すぐ出ちやいそうだ」

惚太郎がそう言って慌てて妹の口からペニスを抜く。

「友達のお兄ちゃんのおちんちん、覚えたね？じゃあこれかが本番だよ」

俺はそう言って惚太郎が用意したタオルを妹と佳代子の顔に巻き、目隠しをする。

「お、お兄ちゃん?」

視界を塞がれ不安そうな顔をする妹たちに俺は惚太郎と目配せし、「これからおちんちんを舐めてもらうからね。今自分が舐めているおちんちんが自分のおにいちゃんのものか、お友達のお兄ちゃんのものか当てなさい」

「ええ〜!?!」

「毎日しゃぶってるんだからこんなの簡単だろ?」

俺と惚太郎は並んでペニスを妹の鼻先に差し出し、ペチペチと鼻を鼻を叩く。

「よく舐めたら銜えていいからね。五回顔を前後させたら口を離してどっちのおちんちんか答えなさい。まずは明美」

妹がおずおずと舌を伸ばし、惚太郎のペニスを舐める。竿を舐め上げ、玉袋を口に含んでから亀頭を銜えこむ。惚太郎は妹の口にペニスを入れ、五回頭を前後させた。

「次は佳代子ちゃんだよ」

俺がそう言うのと今度は佳代子の口に惚太郎がペニスを当てる。二人とも舐めたのは惚太郎の方というちよつと意地悪な問題だ。

「どう? 明美、どっちのおちんちんだった?」

「う〜ん、と……お兄ちゃんのじゃないと思う。佳代子ちゃんのお兄ちゃんのおちんちんだと思うけど」

「え? 私も自分のお兄ちゃんのおちんちんだと思っただけ?!」

「正解だよ。二人とも舐めたのは惚太郎君のおちんちんだ。これは簡単すぎたかな。じゃこれからが本番だよ」

俺と惚太郎は自分の妹にペニスを差し出し、フェラチオをさせる。やはり妹の口は最高だ。俺たちは射精の寸前にペニスを抜き、惚太郎が用意した紙皿に思いつきザーメンを吐き出すと、それをもう一枚の紙皿に分けた。俺と惚太郎のザーメンが乗った紙皿が二枚ずつ出来る。

「これから紙皿に乗ったザーメンを二つ舐めてもらうからね。どつ

ちが自分のお兄ちゃんのザーメンか当てるんだ」

「そ、そんな」

「毎日飲んでるんだから分かるはずだよ。さ」

妹と佳代子の顔の前にまず俺のザーメンが乗った紙皿を差し出す。くんくんと臭いを嗅いだ後、二人が舌を伸ばしてザーメンを舐める。それから少し啜って口の中で味わう。

「じゃあ二つ目だ」

今度は惚太郎のザーメンが乗った紙皿を差し出す。同じように臭いを嗅いでから舐める。

「最初に舐めたのが自分のお兄ちゃんのザーメンだと思ったら右手を、後から舐めたのが自分のお兄ちゃんのだと思ったら左手を上げなさい」

俺が言うと、二人は首をかしげながらゆっくりと手を上げた。妹は右手、佳代子は左手だ。

「おお。二人とも正解だ！流石だな」

「本当だ。お兄ちゃんはうれしいよ。ちゃんとお兄ちゃんの味を覚えてくれてるんだな」

「もう、どっちのお兄ちゃんも本当に変態なんだから」

そう言いながらも妹は紙皿に乗った俺のザーメンを残らず舐めとった。目隠しを取り、正解のご褒美を上げると言うと、二人とも嬉しそうに頷く。

「好きな体位でしてあげるよ。どれがいい？」

妹は正常位、佳代子は後背位を希望した。仰向けになった妹の顔の上に四つん這いになった佳代子の顔が来るようにし、それぞれ妹の才マンコを貫く。

「ああっ！んんっ!!」

「はあっ！ああっ!!」

ピストンを始めるとたちまち可愛い嬌声が二重奏を奏でる。

「お互いのいやらしい雌顔を見ながら昇り詰めるんだ」

「お、お兄ちゃあん！」

胸を揉みながら快感に歪む二人の肉奴隷の顔を見つめる。最高の

気分だ。俺と惚太郎は幸福感に包まれながら愛しい妹のオマンコを堪能し、絶頂へと昇り詰めていった。

## 二人の肉奴隷 ― 浣腸我慢比べ

激しい絶頂を迎え荒い息を吐く妹たちを見て充足感に浸った俺たちは一休みして夕食の準備をすることにした。妹と佳代子が料理を作り、俺と惚太郎はそれを手伝うという名目で裸エプロン姿になった二人を見て楽しむ。

「毎日裸見てるのに何でこんな格好見たいの？」

「分かってないな。裸エプロンは男のロマンなんだよ。なあ、惚太郎君」

「ええ。ある意味全裸よりいやらしいですからね。眼福というやつです」

「やっぱりお兄ちゃんたちは変態だよな」

ため息を吐く妹の隣に立ち、むき出しのお尻に手をやる。アナルに指を入れると、妹が身をよじって抗議した。

「料理の邪魔だからやめて」

「はいはい」

妹たちの作った料理を食べ食器を片付けると、惚太郎がいそいそと次の計画のための準備を始める。

「何してるの？お兄ちゃん」

「食事の後は排泄だろ。ねえ先輩」

「そういうことだ」

「か、浣腸するの!？」

「ああ。察しがいいな、佳代子」

「そんな……明美ちゃんたちの前でうんちするなんて」

「明美も浣腸するから大丈夫だよ」

「何が大丈夫なのよ!?!だって専用便器持ってきてないじゃない」

「惚太郎君が用意してくれたよ。心配しなくてもいい」

「心配してるわけじゃないよ!」

妹の抗議をよそに準備はうつつがなく進む。新聞紙が敷かれ、二つの金タライが並べられた。片方には「佳代子専用便器」と書かれている。



「よし、じゃあ我慢比べだ。二人とも頑張つて」

ふうふうと息を吐きながら妹と佳代子が尻を振る。少しでも便意を紛らわせようとしているようだ。

「ただ我慢するだけじゃ退屈だろ。おちんちんをしゃぶって気を紛らわしなさい」

俺と惣太郎が妹の前に立ち、ペニスを突き出した。二人はためらいなく舌を伸ばし、兄のペニスを舐め回す。フェラチオに集中して便意から気を逸らそうとしているのだろう。

「んんっ！はあっ!!」

情熱的に舌を這わせながら妹と佳代子の顔が紅潮していく。じわじわと便意が限界に近づいているようだ。

「すごい熱心だな佳代子。気を抜くと出ちやいそうだ」

惣太郎がまるで苦しんでいるように眉を寄せる。それだけ佳代子も必死に耐えているのだろう。だがもう三回出しているのでそう簡単には漏らさない。それにこの後勝者のアナルに射精しなければならぬのだ。

「ああっ……お兄ちゃん、もう」

「限界か明美？勝負は佳代子ちゃんの勝ちかな」

「いやあ。おちんちん欲しいもん」

懸命に腰を動かし、妹が最後の抵抗を見せる。だがそろそろ限界だろう。俺と惣太郎は排便の瞬間をしつかり見るべく二人の後ろに回る。ちなみに家から持ってきた8mmをセットして今の様子は撮影していた。

「ううっ！もう……」

妹が苦しげに声を漏らす。勝負あったかと思えたその時、ぶびゅううううっ!!

「ああ——っ!!」

佳代子が絶叫し、その尻から軟便が飛び出す。「佳代子専用便器」に向けて次々と茶色い便が放たれ、異臭が部屋に漂う。

「佳代子我慢できなかつたか。ふふ、相変わらず臭いな」

「いやあ……」

佳代子が涙を浮かべてかぶりを振る。しかし排便は止まらず、洗面器の周りの新聞紙にも飛び散っていく。

「私もダメえっ!!」

妹が叫び、勢いよく大便が噴き出した。肉奴隷となった妹二人が並んで排便をしている姿はいやらしく、目を見張るほど美しい。俺とつ惚太郎は息を呑みながらその光景に見入った。

「はあ……はあ」

長い排便を終え、妹と佳代子が荒い息を吐く。辺りは軟便が飛び散り、鼻をつまみたくなるような臭いが充満していた。

「明美ちゃんの勝ちだね。おめでどう」

俺と会惚太郎は妹たちの尻を拭いてやり、洗面器や新聞紙の処理をする。それから勝った妹の肛門に油を塗って挿入の準備をした。

「惚太郎君、先に入れていいよ」

「いいんですか、先輩」

「ああ。明美、お兄ちゃん以外のおちんちんが初めて明美の中に入るぞ。しっかりと感じなさい」

「ああ……」

妹が上気した顔で俺を見つめる。惚太郎がごくりと息を呑んで妹の肛門にペニスを当てる。

「いくよ、明美ちゃん」

ずぶりと惚太郎のペニスが妹の肛門に入り、妹が「うんっ!」と声を上げる。根元まで一気にペニスが沈み込み、惚太郎がうっとりとした顔で腰を振る。

「ああ! キツくて熱くて……気持ちいい! 先輩、明美ちゃんのお尻、すごい名器ですね」

「ありがとう。奥の上の方がGスポットなんだ。突いてやってくれ」

「肛門にGスポットがあるなんてすごいですね。ああ! 本当に気持ちいい」

「ああっ!! んっ!」

激しく肛門をかき回され妹が顎を跳ね上げる。妹が俺以外の男

に犯されてあえいでいるのを見て、俺は異様な興奮を覚えた。

「お兄ちゃんに犯されているときより感じてるんじゃないのか？お兄ちゃんはショックだなあ。明美が誰に犯されても喜ぶビッチだったなんて」

「いやあーそんな…そんなこと、ないいつ!!」

「ふふ、先輩、あまりいじめないで上げてくださいよ。明美ちゃんがつこんな感じてるのは先輩に見られてるからですよ」

それは俺も感じていた。妹は俺に見られながら他人に犯されているという状況に興奮しているのだ。それに気づくとはやはり惚太郎も調教の素質がある。

「ううっ！出るよ、明美ちゃん!!」

惚太郎が一度腰を引き、思いきり叩きつける。静止した腰がビクつと痙攣し、妹が絶頂の声を上げる。妹の中に惚太郎のザーメンが注がれているのだ。息をするのも忘れ、その光景に目を奪われる。

「ふう、最高だったよ、明美ちゃん」

惚太郎がゆっくりペニスを抜く。俺は間髪入れず妹の後ろに行き、入れ替わりに自分のペニスを突っ込む。

「うああっ!」

「約束通り連続で出してあげるよ。今度はお兄ちゃんのおちんちんをたっぷり感じるんだ」

「お兄ちゃん…」

「ふふ、すっかり蕩け切って。やっぱり自分のお兄ちゃんのおちんちんがいいんだね。いやらしくて綺麗だよ、明美ちゃん」

「いやあ、恥ずかしいよお」

「恥ずかしければ恥ずかしいほど気持ちいい。よかったな明美。惚太郎君が佳代子ちゃんを肉奴隷にしたお陰で新しい快感を得ることが出来たな」

「ああ…お兄ちゃん。き、気持ちいい」

パンパンと腰を当てるたび妹が甘い声を漏らす。惚太郎のザーメンでドロドロになったアナルをかき回し、快感に酔いしれる。

「お、お兄ちゃん…」

そんな俺たちのアナルセックスを見ながら佳代子が涙を浮かべて惚太郎にすぎるように言う。

「お願い、私にもして。お兄ちゃんのおちんちん、お尻に入れて」

「ダメだよ。佳代子は負けたんだから。ご褒美はなしだ」

「いやあ、お願いお兄ちゃん」

「切なそうだね佳代子ちゃん。惚太郎君、意地悪しないでいれてあげたらどうだい?」

「しようがないな。じゃあ条件としてこれから佳代子はお兄ちゃんだけでなく先輩の肉奴隷にもなるって約束するんだ」

「え?」

「おいおい、いいのかい?惚太郎君」

「ええ。オマンコに出すのはダメですが、お口とアナルは使ってやってください。調教の先輩として妹をもっと淫乱にしてやってほしいんです」

「困ったお兄ちゃんだねえ、佳代子ちゃん。俺としては願ってもないことだけど、いいのかい?」

「わ、私はお兄ちゃんの肉奴隷だから……お兄ちゃんの言うことには従います。お兄さん、私を可愛がってください」

「いい子だね。惚太郎君はいい妹を持って羨ましいな」

「ひどい……わ、私だってお兄ちゃんの言うことは何でも」

妹が泣きそうな顔で俺を振り返る。

「勿論だよ。お前は最高だ。明美が俺の全てだっていうのは分かってるだろう?佳代子ちゃんは可愛いけど、お前が一番だよ。佳代子ちゃんだって惚太郎君が一番さ。俺が調教するのはおまけみたいなものさ」

「心配しなくても明美ちゃんを俺の肉奴隷にしたいなんて言いませんよ、先輩」

「俺と一緒にいるときはアナルや口は使っていいけどね。ところでもう佳代子ちゃんが待ちきれないんじゃないかい?」

惚太郎が頷いて佳代子のアナルにペニスを当てる。佳代子の顔はもう完全に発情していた。

「ああ——っ！」

兄のペニスを埋め込まれ、佳代子が悦びの声を上げる。こちらも負けじと激しく腰を振り、妹の嬌声を大きくさせる。

「あっ！あっ！あっ！あっ！！！」

兄のペニスにアナルを犯され、二人の妹、そして肉奴隷が快感に身を震わせる。ぐうつと亀頭が膨らみ、思うまま妹のアナルにザーメンを吐き出す。

「お兄ちゃあああああん！！！！」

アナルで絶頂した美少女二人の叫びが自重なる。美しく淫乱な中一の肉奴隷。その全てを思うままに犯せる歓びに俺は感動のあまり涙を浮かべた。

## 二人の肉奴隷 ― 二穴絶頂

「はああっ……」

クリトリスを甘噛みされ、佳代子が嬌声を上げる。兄だけでなく俺の肉奴隷にもなった佳代子に記念の愛撫を行っているところだ。小陰口を指で広げて舌をオマンコの中に差し入れ、佳代子の愛液を味わう。妹のそれとは微妙に味が違うように思えた。

「感度が良いね、佳代子ちゃん。もつと恥ずかしい思いを擦ればどこまでも気持ちよくなれるよ、きつと」

「ああっ……そんな」

「お兄ちゃん、佳代ちゃんを私みたいにしないで」

「俺がしなくても惣太郎君がするだろう。もう大分墮ちてるようだし」

「お兄ちゃんが余計な事教えるからだよ」

「お前は今幸せなんだろう？その幸せを友達にも味あわせてあげたいと思わないのか？」

「わ、私はもうおかしくなっちゃってるんだもん」

「なら佳代子もおかしくなればいい。もう明美ちゃんと同じ肉奴隷になったんだから」

惣太郎が佳代子の頭を撫でながら言う。

「はああ……おかしくなると……幸せになれる？明美ちゃんみたい」

「答えてあげなさい、明美」

「ああ……なっちゃうの？佳代ちゃんも私みたいに」

「そうだよ。身も心も完全な肉奴隷に堕ちたらどうなるのか佳代子ちゃんに教えてあげるんだ」

妹は少し悲しげな表情を見せ佳代子に近づくと、仰向けになった佳代子に顔を寄せ、潤んだ瞳で囁くように告げる。

「ごめんね佳代ちゃん。私のせいで。でもお兄ちゃんに犯されるのって最高なんだよ。心の底から肉奴隷になって自分から犯されることを望めば、信じられないくらい気持ちよくなれるの」

「ああ……明美ちゃん」

「一緒に堕ちよう？身も心も完全な肉奴隷になってお兄ちゃんに犯されるためだけに生きよう？毎日近親相姦して最高に幸せになろう？」

「うん……」

妹がさらに顔を寄せ、佳代子と唇を重ねる。完全な肉奴隷となった二人の妹がキスをしている姿に俺は感動し心が震えた。見ると惣太郎も身を震わせて涙を流している。

「ありがとうございます、先輩。佳代子が完全に堕ちてくれて、俺、感動です」

「俺もだよ。二人が愛おしくて仕方ない。また勃起してきたよ」

「佳代子が完全に堕ちてくれた記念にあれをしたいんですけど」

「もうかい？まあ俺もしてみたいとは思ってたんだ。惣太郎君がいなら」

「ええ。佳代子、四つん這いになって先輩にお尻を向けるんだ」

「は、はい」

よろよろと起き上がった佳代子が言われた通り四つん這いになる。

俺は油を佳代子の菊門に塗り、自分のペニスを押し当てる。

「ああ……」

「力を抜いてね」

一気に根元まで貫き、そのまま佳代子の体を抱え上げるようにして起こす。少し腰を浮かせた佳代子の前に座った惣太郎がアナルを貫かれた妹の足を開く。

「何をやる気なの？お兄ちゃん」

明美が不安そうな声で言う。

「よく見ていなさい、次はお前の番だからね」

「佳代子いくよ。まだ明美ちゃんも経験してない二穴責めを味あわせてあげる」

「えっ？」

惣太郎がコンドームを付けたペニスを佳代子オマンコに当てる。佳代子の顔が恐怖の色を浮かべる。

「ま、待って！お兄ちゃ……」

「佳代子！」

惣太郎が一気に佳代子の中を貫く。前と後ろを同時に塞がれた佳代子が体を震わせ、大きな声を上げる。

「いやあつ！く、苦しい！」

「佳代ちゃん！」

初めての二穴責めに戸惑う佳代子を見て明美も悲鳴を上げる。

「力を抜いて。オマンコとアナル両方でおちんちんを感じるんだ」

耳元で囁き、ペニスを突き上げる。目の前ではだらしな顔をした惣太郎がやはり佳代子の膣内を擦りあげていた。

「いいっ！いつもより締まりがキつくて……搾り取られそうだ」

「俺もだよ。アナルの壁越しに惣太郎君のチンポを感じて……これは堪らないな」

一人では体験できない二穴責めの快感に酔いながら、腰を振る。中一の美少女を前後同時に犯しているという悦びにいやがうえにも興奮が高まる。

「ああっ！お兄ちゃあん!!」

前後の穴を交互に擦られ、佳代子が甘い声を上げて惣太郎に抱きつく。初めての二穴責めでしつかり感じている。調教の成果は十二分に出ている。

「あつ！あつ！あつ！」

もう佳代子の顔は蕩けきっているだろう。俺は目を丸くして友達の痴態を見つめる明美に微笑みかける。

「どうだ？よく見ていなさい。お前ももうすぐこんなはしたない顔をしてよがりまくるんだからね」

「ああ……佳代ちゃん……気持ちよさそう」

「そうだよ。想像してごらん。自分のオマンコとアナルに同時におちんちんが入るんだ。気持ちよくないわけないだろう？」

「ああ……」

顔を真っ赤にした妹が自分の股間に手をやってまさぐる。オナニーを始めたのだ。つくづく淫乱になってくれた。俺は悦びで思わ

ずにやけてしまう。

「ああ、いい！先輩、俺もう限界です」

「こっちも出そうだ。三人一緒に昇りつめよう」

「ええ！佳代子いくぞ！一緒にいくんだ！」

「ああっ！お兄ちゃん！あっ！ああっ！！」

「ううっ！！」

亀頭が膨らみ、熱い白濁液が佳代子の直腸に噴き上がる。惚太郎も腰を震わせ、快感に顔を歪めている。コンドームの中で射精しているのだ。佳代子も熱い迸りを受けて絶頂の叫びを上げる。

「ああ——っ！」

三人の体がガクガクと震え、溺れるような制の快感に飲み込まれていく。3Pでの絶頂は今までにない快感を与えてくれた。

「ああ……凄かった。これは癖になるな」

「ええ。佳代子もよかったですだろ？」

「ああ……凄い……こんなの」

息も絶え絶えといった感じで佳代子が朦朧とした表情で呟く。最初の二穴責めで完璧に堕ちたようだ。

「さ、佳代子口を開けて」

ペニスを抜いた惚太郎がコンドームを外し、佳代子の口へ中のザーメンを流し込む。とろんとした顔でそれを受け止めた佳代子が口の中で兄のザーメンを味わい、惚太郎の許可でそれを嘔下していく。

「美味しいだろ？佳代子が完全に肉奴隷に堕ちた記念の味だよ」

「うん、お兄ちゃん。美味しい……」

中一とは思えぬ淫靡な表情で佳代子が答える。俺はその顔を見て満足げに頷く。

「惚太郎君、まだいけるかい？うちの妹がもう待ちきれないみたいなんですね」

明美はさつきから股間で懸命に手を動かし快感を貪っていた。佳代子が絶頂したのを見て軽くイッたようだ。

「大丈夫です。明美ちゃんにもこの快感を早く知ってほしですもんね」

「よかったな明美、すぐしてもらえぞ。四つん這いになりなさい」  
「ああ……」

待ちきれないといった顔で妹が四つん這いになる。アナルに油を塗って惣太郎がペニスを突き立てる。

「んんっ!!」

「やっぱり明美ちゃんのアナルは凄いな。入れただけで脳が痺れそうだ」

「よしじゃあこっちもいくぞ」

惣太郎が明美の体を起こし、俺はコンドームを付けたペニスをびしょびしょになった妹のオマンコに押し当てる。何の抵抗もなくペニスが根元まで埋まり、子宮口に龟头が当たる。

「あああっ!!」

「どうだ？前と後ろを同時に塞がれた気分は？」

「す、凄い！苦しいけど……それ以上に頭が痺れるみたいで」

「動くぞ」

俺と惣太郎が同時に動き、妹が「ひいっ！」と声を上げる。佳代子の時もそうだったが肉ひだ越しに惣太郎のペニスの動きを感じられ、得も言われぬ快感と征服感が湧き上がってくる。

「あああっ！お兄ちゃ……ふううっ！」

妹が俺に抱きつき、悲鳴のような声を上げる。だがそれは快感にむせぶ雌犬の声だ。

「明美！いいぞ！凄く気持ちいい！」

「わ、私も！ああっ！いいっ！いいのっ！」

「凄いよ明美ちゃん、さっきよりもっとアナルがきつく締まって！搾り取られるっ！」

三人がそれぞれ快感に酔いしれ絶頂へと昇り詰めていく。

「もう何回も出してるのに！また出る！すぐイキそうだ！」

「俺もだよ。明美、感じなさい。二穴同時責めの快感を骨の髄まで味わうんだ」

「うん！イク！私もイクの！お兄ちゃん!!」

「おおっ!!」

コンドームの中でザーメンが溢れかえる。アナルでは惣太郎が勢いよく射精しているだろう。妹の俺に抱きつく手に力が入り、体が痙攣しているのが伝わる。伊っているのだ。

「あああ……」

快感の余韻に浸り、ゆっくりペニスを抜く。コンドームを外して佳代子と同じように中のザーメンを妹の口に流し込む。

「んっー」

ザーメンを味わう妹の顔は本当にいやらしく美しい。許可を出す  
と喉を鳴らしてそれを全て飲み干していく。その音にまた幸福感を  
味わう。

「二人とも二穴責めが気に入ってくれたようだね。よかった」

それぞれ自分の妹を抱きしめながら俺と惣太郎が囁く。さすがに  
疲れて眠気が襲って来ていた。

「佳代子ちゃんが肉奴隷になってくれたから出来たんだ。ありがとう  
うね」

「それを言うなら先輩が最初に明美ちゃんを肉奴隷にしてくれたお  
蔭ですよ。佳代子もそれで決心できたんですから」

「ひと眠りしたらまたしような。明日ご両親が帰るのは夕方だっけ  
？」

「ええ。予定では」

「じゃあそれまでは精力の続く限り犯してあげるからね」  
「うん」

潤んだ瞳で妹が答える。唇を重ね愛しい肉奴隷を抱きしめる。幸  
せに包まれながら俺たちは眠りに落ちた。

「ああっ！お兄ちゃあん!!」

並んで仰向けになった明美と佳代子がそれぞれ時分の兄のペニスを  
正常位で受け止めながら嬌声を上げる。翌朝になり朝食を食べて  
からずと二人の妹を犯し続けている。すっかり二穴責めの快感に  
はまった二人は前後を同時に擦られる悦びに打ち震え、これまで以上

に俺たちに犯されることを望むと誓った。昼食をはさんでそろそろ帰る時間になり、最後に自分の妹を犯して新たな誓いの言葉を述べさせることにしたのだ。

「明美はー!」

「佳代子はー!」

二人の肉奴隷が声を合わせて隷属の誓いを叫ぶ。

「お兄ちゃんの肉奴隷としてお兄ちゃんに犯されるためだけに生きることを誓います!お兄ちゃんの全てを受け止める肉便器として奉仕することを誓います!」

「佳代ちゃんの」

「明美ちゃんの」

「お兄ちゃんにも口とアナルを使ってもらい、犯されるために全てを捧げると誓います!お兄ちゃん!!」

「明美をー!」

「佳代子をー!」

「時間の許す限り滅茶苦茶に犯してください!お兄ちゃんのザーメンを一滴残らずいやらしい肉奴隷の私たちに注いでください!!」

「おおっ!明美っ!!」

「佳代子おっ!!」

俺と惣太郎がほぼ同時に射精する。それに合わせて明美と佳代子も絶頂を迎えた。

「あ——っ!!」

愛しい肉奴隷二人の絶頂の調べがハモリ、その妙なる調べに心が震える。三年前に明美を肉奴隷にした時と同じ感動に俺は包まれていた。

「んん……」

コンドームから注がれたザーメンを口に含んだまま、妹たちが潤んだ瞳で見つめ合いキスをする。互いの兄のザーメンを交換するように舌を絡め、喉を鳴らして嚙下する。素晴らしい光景だ。

「最後におしっこを飲ませるよ。相手のお兄ちゃんのおしっこを飲むんだ」

二人が頷き、明美は惣太郎の、佳代子は俺のペニスを銜える。そのまま頭を掴み、口内へ放尿する。最高の快感に腰が震える。

「んっ、んっ」

友達の兄の小便を飲み干し、二人が「ご馳走様でした」と言っ頭を下げる。肉便器として完璧な作法だ。

「二人ともよく頑張ったね。愛してるよ。二人は今日から俺と惣太郎君の肉奴隷だ。身も心も全てお兄ちゃんに捧げて時間の許す限り犯されるんだよ」

「はい」

「本当にありがとう。愛してるよ。ずっと犯してあげるからね。みんな最高に幸せになろう」

「はい」

迷いなく頷く明美と佳代子の目に涙が光る。それは幸せの涙だ。俺と惣太郎の目も幸せに潤んでいた。

「先輩、ありがとうございました。これからも妹たちと幸せになりましょう」

「ああ。俺たちは妹のために全てを捧げる覚悟をしなきゃいけないぞ、惣太郎君」

「はい」

最後にお互いの妹と熱いキスを交わし、俺と明美は惣太郎の家を後にした。最高の近親相姦合宿はこうして夢のような時間を過ごして終わった。

## 快樂に溺れる兄妹たち

佳代子という新たな肉奴隷が誕生したことで、俺の妹への欲情は前にも増して燃え上がった。普段は家で妹を徹底的に犯し、休みの日やどちらかの親が不在の日はお互いの家へ行き来して4Pをした。特に二穴責めの快感にどっぷりと嵌まった明美と佳代子は安全日にオマンコとアナル同時に中出しされるのを心待ちにするようになっていた。

「ああっ！んんっ!!」

今日は明美の安全日。全裸の妹はオマンコを俺の、アナルを惚太郎の生ペニスに座位で貫かれ、激しく身もだえ嬌声を上げていた。

「お兄ちゃん！ああっ！凄いい！凄いいのおっ!!」

完全に焦点の合わない目で痴呆のように口を開けて泡を飛ばす妹。前後の穴を同時に擦られ、二穴責めの快感に酔いしれるその表情はとて中一とは思えぬ堕ちきった雌犬のそれだ。何とも淫靡で、見惚れるほどに美しい。女というのは犯されることでどれだけ美しくなるのかと思う。まだ13歳でこれなのだ。この先、成熟した女性に育つたらどうなってしまうのだろうか。楽しみでもあり、空恐ろしくもある。

「ああ……明美ちゃん、気持ちよさそう。そうだよね、二穴責め、最高だもんね」

やはり全裸の佳代子が快感に身もだえる明美を見ながらうつつとりとした表情で羨ましそうに呟く。その手は自分の股間に伸びており、先ほどからくちゆくちゆといやらしい水音を立てていた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃあああああん!!!」

俺の肩に回した妹の腕に力がこもる。絶頂が近いのだ。膣内がきゅうつと締めまり、射精を促す。こちらも限界だ。

「おおっ！いくぞ！出すぞ！明美っ!!」

「お、俺ももう！先輩、一緒に出しましょう!!」

「あ——っ!!」

妹の叫びに合わせて俺と惚太郎の腰がビクビクと震え、大量のザーメンを吐き出す。熱い欲情の塊が子宮の奥を叩く。あまりの快感に頭が真っ白になる。

「お兄ちゃんあああああん」!!!」

泣き声のような絶頂のよがり声が空白になった頭に響く。天使が頭の中で鐘を鳴らしている幻想が浮かぶ。四十年の時を遡り人生をやり直して遂に掴んだこの幸せを祝福してくれているような気がした。

「ああ……明美」

三人同時に絶頂を迎え、言い表せないほどの快感の余韻に浸る。目の前にある美しい妹の蕩け切った顔にため息を吐き、唇を重ねる。

「綺麗だよ。犯されれば犯されるほどお前は美しくなる。お兄ちゃんは本当に幸せだ。お兄ちゃんの妹に生まれてきてくれてありがとう。お兄ちゃんに犯されるために生まれてきてくれて、本当にありがとう、明美」

「ああ……お兄ちゃん」

妹の頬に涙が流れる。気が付くと自分も泣いていた。

「ああ……お兄ちゃん、私にもして。もう我慢できない」

佳代子ががるような目で惚太郎に近づく。その顔はやはり発情した雌犬のものになっている。

「分かってるよ。でもその前にいつものをしてからな」

俺と惚太郎はゆつくりとペニスを抜き、ウエットティッシュでよく拭き上げる。それからワイングラスを用意して、順番にその中へ小便を出した。

「いただきます」

俺と惚太郎の小便が入ったグラスを受け取り、少し臭いを嗅いだ後、中身をすべて飲み干す。いつからか二穴責めで前後同時中出しをされた後はこうするのが恒例になっていた。

「ご馳走様でした」

最後の一滴までを飲んで明美が頭を下げる。肉便器として完璧な作法だ。俺はここまで妹を墮としたという充足感、全能感とここまで

してしまつたのだという良心の呵責がない交ぜになり、そこへ狂おしいまでの妹への愛情が重なって頭が沸騰しそうになつた。あまりにも可愛い。苦しいくらいに愛おしい。犯したい。徹底的に犯しぬきたい。相反するようで心の奥底では通底したその思いが全身を駆け巡り、泣きながら妹をきつく抱きしめる。

「ああっ！愛してる！ずっとずっとこうしていたい！明美っ!!」

「私も！ずっと！ずっと愛して！お兄ちゃん!!」

唇を重ねながら仰向けにし、硬いままのペニスをオマンコに押し当てる。一気に根元まで貫き、全身をまさぐり、舐め回す。ただ妹を自分のものにする事で頭がいつぱいになる。

「「ああっ！いいっ!!」

可愛らしい喘ぎ声がハモる。見ると佳代子が惚太郎にバックからアナルを犯されていた。美しい二人の肉奴隷が兄に前と後ろの穴を貫かれて悦びの声を上げている。これほどの幸せな時間が他にあるだろうか。いや、あるはずがない。

「お兄ちゃ……ああっ！凄いい！またイク！お兄ちゃんのおちんちん！気持ちよすぎるよおっ!!」

「明美のオマンコも！最高だ！気持ちよすぎる！出すぞ！明美の子宮にいつぱい出すぞ！」

「出して！明美の肉便器子宮、お兄ちゃんのザーメンでパンパンに満たして！明美を幸せにしてえっ!!」

「お兄ちゃん！ああっ！佳代子のお尻、凄いの！お兄ちゃんのおちんちんが熱くて！気持ちいいのっ!!」

「佳代子っ！いいぞ！お前のアナル！きつくて熱くて……凄いいっ！もう出るっ！」

「出してえ！佳代子のお尻の中、お兄ちゃんのザーメンでいつぱいにしてえっ!!」

近親相姦という最高のセックスの快感に酔いしれる二組の兄妹がそれぞれ悦びの嬌声を上げる。体も心も蕩けそうな幸福感の中、最愛の妹を肉奴隷に堕とした二人の兄が肉便器となつたその体内へ凄まじい勢いで劣情をぶちまける。

俺は子宮に

惣太郎は直腸に

「お兄ちゃあああああん!!!!」

白く濁った愛情の塊に体内を焼かれ、肉奴隷となった二人の妹は幸せの涙を流しながら絶頂を噛み締めていった。

「明美をお兄ちゃんに犯されるためだけの肉便器にしてください！お兄ちゃんの熱いザーメンを一滴残らず明美の中に注ぎ込んでくださいー！」

「ああ、恥ずかしいよお」

明美が顔を真っ赤にして俯く。今日は俺の家で明美が肉奴隷になった小4の時の動画を惣太郎や佳代子と見ている。明美はすごく嫌がったのだが、惣太郎がどうしても見たいと頼み込んで、渋々了承させたのだ。

「凄い……九歳の女の子が自分で肉便器になることを誓うんで。ああ……羨ましいです」

惣太郎が食い入るように場面を見つめて呟く。

「明美ちゃん、本当にこんな歳でお兄ちゃんとセックスしてたんだね。凄い」

佳代子もじっと画面に見入っている。明美と佳代子は全裸で、それぞれ自分の兄の膝の上に乗っていた。勿論俺と惣太郎も全裸だ。

「見ないで。ああ、恥ずかしい」

明美が顔を覆う。

「今更恥ずかしがることはないだろ？肉奴隷の先輩として佳代子ちゃんによく見てもらいなさい」

「本当に自分が情けないです。俺も佳代子が小学生のうちに、初潮が来る前に告白しておけばよかった」

「そんな変態はうちのお兄ちゃんだけでいいですよ」

そう言いながら明美の股間はびしょびしょに濡れている。かつての自分の痴態を見て興奮しているのだ。俺はテープを入れ替え、隷属式の映像を流す。「肉奴隷誓約書」を読み上げる九歳の明美に全員が

息を呑む。

「本当に凄いですね、先輩。この内容、先輩が考えたんでしょ？」

「ああ」

「明美ちゃん、小4でもうこんな誓いをしたんだ。凄いな」

「この歳で自分で肉奴隷になる決心をするなんて、先輩どういう調教をしたんですか？」

「ありったけの愛情をぶつけたただだよ。全身全霊で口説いたからな」

「お兄ちゃんの愛情は全部ザーメンになって注がれたけどね」

「子宮に直接説得したのがよかったかな。あとアナルのGスポットにも」

「お兄さん、本当に変態なんですね。普通小学生にここまでさせませんよ」

佳代子が明美を見ながら言う。

「普通じゃないとも。最高の幸せを手にするためだからね。佳代子ちゃんももうそれが分かっているだろう？」

「分かって……るのがもうおかしいんですね。私もすっかりおかしくなっちゃっているんだな」

「そうだよ。お兄ちゃんもう我慢できなくなっちゃったよ。佳代子、しよう」

佳代子の胸を揉みながら惣太郎が興奮した様子で言う。明美の痴態を見てすっかり欲情したようだ。

「うん」

佳代子が少し恥じらいながら四つん這いになる。今日は佳代子の安全日だ。俺は明美を膝から下ろし、佳代子の後ろに回ってアナルにペニスを当てる。

「いくよ、佳代子ちゃん」

佳代子のアナルを貫き、体を起こす。天を突く勢いのペニスをオマニコに押し当て、惣太郎がぐくりと息を呑む。

「いくぞ佳代子」

一気に根元まで突っ込みグイッと腰を突き上げる惣太郎に合わせ、

俺も腰を振る。腸壁越しに惚太郎のペニスを感じ、キツキツのアナルの快感を味わう。

「はあっ！お兄ちゃん！うはっ！いい、いいっ！」

二穴責めの快感にたちまち佳代子の顔が蕩ける。それを見つめる明美の顔も発情し、呼吸を荒くしながらオナニーを始める。

「お兄ちゃあん!!」

テレビ画面では小4の明美が俺に犯されて嬌声を上げている。それをBGMにして二人の肉奴隷が嗜虐の快感を貪る。

「佳代子！佳代子！」

惚太郎の腰の動きがどんどん速くなっていき、佳代子の体がビクビクと震える。二人とも限界が近いようだ。俺も腰の動きを速めて絶頂のタイミングを合わせる。

「先輩、もう！」

「いいぞ。一緒に」

「あ——っ!!」

オマンコとアナルで同時にザーメンの爆発が起こり、佳代子がピーンと体を反らして昇り詰める。凄まじい快感に頭がくらくらする。

「おおっ！」

余韻に浸りながらペニスを抜くと、惚太郎が佳代子押し倒してピストン運動を再開する。

「連続か。ふふ、分かるよ。妹の膣内に出すのは最高の幸せだもんな」

「お、お兄ちゃん……」

明美が俺の肩に手を置き、すぐるような目で見つめる。いつもなら佳代子に俺たちの小便を飲ませるところだが、惚太郎はセックスに夢中なので先に妹を慰めてやることにする。

「いやらしい顔だ。完全に発情した雌犬だな」

「意地悪しないでえ」

明美の乳首にしゃぶりつき、反対の乳房を揉みしだく。柔らかく弾力がある肌の感触が素晴らしい。仰向けにさせて舌を下げていき、お漏らしをしたようにびしょびしょになったオマンコを舐め上げ、クリ

トリスを甘噛みする。

「はああっ！」

足を引くひくさせて感じる妹の膣に指を三本突っ込み、ぐちゃぐちゃにかき回す。愛液がとめどなく溢れてきて畳を濡らしていく。

「お兄ちゃんああん!!」

佳代子の絶叫が響き、惚太郎の腰がビクビクと痙攣する。中出ししているのが分かる。

「はあ……はあ」

荒い息を吐く兄妹が見つめ合い、唇を重ねる。俺はそれを見て微笑みながらワイングラスを用意する。ウエットティッシュでペニスを拭いてからグラスに向けて放尿し、ゆっくりペニスを抜いた惚太郎がそれに続く。

「いただきます」

ザーメンの残滓が混じった小便を佳代子が飲み干す。「ご馳走様でした」と言って頭を下げる彼女を明美が羨ましそうに見つめる。

「お兄ちゃん、お願い」

まだ絶頂に達していない明美が辛そうな顔で俺に抱きつく。俺はコンドームを付けて明美を四つん這いにさせ、バックからオマンコを貫いた。

「ふあああっ!!」

体を起こし背面座位になって妹の子宮を突く。テレビの中では三年前の自分が同じ格好で犯されている。画面と向かい合うようにして座り、小学生の明美の声を聞きながら中学生の明美に声を上げさせる。

「ああ……明美ちゃん、凄い」

あわせ鏡のように向かい合って犯される二人の明美を交互に見ながら佳代子が甘い声を漏らす。その体を後ろから貫き、惚太郎が同じような背面座位の形で妹の体内をかき回す。

「あっ！お兄ちゃん、まだ？」

「こんな光景見せられて収まるわけないだろ？佳代子も明美ちゃんみたいに完全な雌犬に堕ちてくれ」

「もう堕ちてるよお。体が疼いちゃってるの。お兄ちゃんにもっと犯してほしくてたまらないの」

「ああ！佳代子！」

胸を揉みながら惚太郎が激しく腰を振る。大量に中出しされたザーメンが逆流して畳に飛び散る。

「よかったな明美。お友達と一緒に完全な肉奴隷になれて」

「ああ……お兄ちゃん！してえ！明美を気持ちよくしてえ！佳代ちゃんに負けないくらい犯してえ!!」

「勿論だよ。明美、一緒に天国にいこうね」

「ああっ！」

画面の中で昔の俺が腰の動きを速める。射精が近いのだ。今の俺もそれに合わせて必死に腰を振る。

「いくぞ。三年前の自分と向かい合って一緒にイクんだ」

「うん！うん！」

だらしなく口を開けて明美が快感を貪る。ぐぐつと亀頭が膨らみ、絶頂の波が押し寄せる。

「お兄ちゃああん!!!」

画面の中とつ現実の明美の叫びが重なる。三年の時を隔てた二人の妹が同時に至高の快感に打ち震える。そして少し遅れてもう一人の肉奴隷が絶頂の叫びを上げる。

「お兄ちゃああん!!」

兄に犯される悦びに魂の奥底まで浸りきった二人の妹がメスの幸せにむせび泣く。近親相姦することしか考えられなくなった淫靡な肉奴隷の美しさに二人の兄は感動しながら頷きあう。ここが天国なのだと確かめ合い、お互いの最愛の女性を強く抱きしめながら至上の快樂に身を委ねた。

## 水着の肉奴隷

それからめくるめく近親相姦の悦びを骨の髄まで堪能しながら月日は流れ、明美と佳代子は中三になり、惣太郎は高三に、俺は妹を犯す合間に必死に勉強し、何とかそこそこのいい大学へ入ることが出来た。前の人生の失敗を繰り返してはならない。幸い前世の記憶を持ったままタイムリープした俺は世の流れがある程度分かっていたので、上手く立ち回ることが出来た。バブル景気も、それが弾けることも、リーマンショックも分かっている。幸い俺が大学を卒業する少し先までバブルは続くはずだ。そこそこのいい大学に入ればそこそこのいい所に就職できるだろう。

「本当に気を付けてね」

母にそう言われ、俺は「大丈夫だよ」と頷く。夏休みになり、俺は明美と佳代子、惣太郎兄妹と一緒に海へ出かけるところだった。明美と佳代子は高校受験の正念場だったが、少しは息抜きが必要という事で両方の親は許してくれた。夏休み前に免許を取った俺は父が買ってくれた中古のセダンを運転して海へ行くことにした。免許取りたてなので母が心配するのも無理はないが、運転についても記憶があるので、実のところベテラン運転手と言っていい腕はあるのだ。実際免許も一発ですぐに取った。

「それじゃよろしくお願いします」

家の前まで迎えに行くと、惣太郎と佳代子の母親がわざわざ外まで出てきて頭を下げた。二人を後部座席に乗せ、俺は目的の海へと向かう。

「お兄ちゃん、本当に運転大丈夫？」

助手席に座った明美が心配そうに訊いてくる。傍目から見れば俺は新米ドライバーだし、車はパワステも付いていないオンボロの中古だから仕方ないが、車種は違うもの前世でこういう車はよく運転していたのだ。

「大丈夫だよ」

重いハンドルを握りながら答える。高速に入りスピードを上げるとようやく妹も安心したようだ。

「車から宿の予約まで本当にすいません、先輩」  
後部座席で惣太郎が申し訳なきそうに言う。

「気にしないでいいよ。着くまで佳代子ちゃんとイチヤイチャしてくれ」

「もう、お兄さんったら」

佳代子が少し怒ったような声で言う。しかしバックミラー越しに見たその顔は紅潮し、まんざらでもなさそうだ。

「それじゃお言葉に甘えて」

惣太郎が笑いながら佳代子の胸に手を回す。ちらちらとバックミラーを見ながら俺は苦笑した。人のことは言えないが、惣太郎も妹なしでは生きられないんだな、と改めて実感する。

「ちよっとお兄ちゃん！ダメ、こんなところで」

「お前はお兄ちゃんの肉奴隷だろう？いつでもどこでもお兄ちゃんに犯されるなきやいけないんだぞ」

「だって周りの車から見えちゃう」

「こんなスピードで走ってるんだ。誰にも見えやしないよ」

なおも抗議しようとする佳代子の唇を惣太郎の唇が塞ぐ。もっと見ていたいのが、高速を走っている時にバックミラーに視線をずっとやっっているわけにもいかない。

「お兄ちゃん、運転中なんだから変な事考えないでね」

妹が釘を刺すように言う。さすが俺の考えはお見通しのようだ。

「ああ。さすがに高速を走っているときに変な事はさせないさ。事故るわけにはいかないからな」

家から持ってきたアニメ主題歌のテープを流しながら運転に集中する。勇ましいヒーローソングの調べに混じって甘い声が聞こえてくる。佳代子が惣太郎の愛撫を受けているのだ。

「ダメ……んっ！明美ちゃんのお兄ちゃんが運転してるのに……はあっ」

「先輩、気が散るなら我慢しますけど」

「気にしなくていいって。着くまでに二、三回イカせてもいいよ」  
「ありがとうございます」

「だからそんな……ああっ！」

佳代子の嬌声が大きくなる。じっくり見れないのが残念だが、お楽しみは着いた後に取っておこう。今は安全運転が第一だ。

「意外に空いてて助かったな」

平日とはいえ夏休み期間だ。もう少し渋滞するかと思っていたのだが、今のところ道はスムーズに流れている。オンボロであまりスピードが上がらないので左側車線を走っているが、隣をビュンビュン車が追い越していく。確かにこれなら惚太郎の悪戯が見られる心配はないだろう。

「裸になつてもらうくらいはしてもいいかな」

俺の呟きに妹が「え？」という顔をする。

「ずっと同じ景色を見てるのも退屈だしね。明美の裸を見れば運転の疲れとか眠気も吹き飛ぶだろうし」

「ちよ、ちよつとお兄ちゃん！」

「上だけでいいよ。胸を見せるだけで」

「そんな！こんなところで。本当に誰かに見られたら……」

「左側を走ってるんだから、明美の側を通るのはバイクか緊急車両くらいだよ。それだつて並走でもしない限りは見られる心配はないさ」

「で、でも」

「いいから。お兄ちゃんが眠くならないよう元気にしてくれ」

「もう」

口を尖らせながらも明美は服に手をかけ、裸になる。かなり大きくなった形のいい乳房を見て思わず笑顔になる。

「本当に変態なんだから、お兄ちゃん」

「感慨深いな。お前を肉奴隷にしたときはまだぺったんこだった胸が……まで育つて」

「お兄ちゃんが毎日吸つたり揉んだりするからだよ」

「それなのにまだ乳首がピンク色なのが素晴らしい。形もお兄ちゃ

んの理想形だしな」

「佳代子ちゃんたちの前であんまり恥ずかしいこと言わないで」

「気にしなくていいよ明美ちゃん。佳代子は気持ちよくってそれどころじゃないみたいだし」

「お兄ちゃんのバカあ」

後部座席から睦み合う兄妹の甘い声が聞こえる。もう佳代子はかなり感じているようだ。

「今更胸の色や形のことを言われて恥ずかしがることもないだろう。お互い数えきれないくらい見てるんだから」

「そういうんじゃないの！お兄ちゃんには女の子の気持ちから分からないよ」

「お前の気持ちはお兄ちゃんが一番よく分かってるさ。本当は今すぐ全裸になってお兄ちゃんのおちんちんを入れてほしいんだろう？」

「バカ！知らない！」

顔を真っ赤にして妹がそっぽを向く。しかしその顔に興奮の色が浮かんでいるのを俺は見逃さなかった。ふふ、海に着いてからが楽しみだ。

「そろそろ高速を降りるよ。下の道じゃさすがに見られそうだ。服を着ていいよ」

しばらく走って目的の出口の看板が見え、俺は妹にそう言った。その直後、荒い息遣いをしていた佳代子が大きな声を上げる。惚太郎の愛撫で昇りつめたらしい。

「ふう、何とか間に合った。中途半端じゃ可哀そうだもんな、佳代子」

「バカあ」

バックミラーに目をやると、疲れたような表情の佳代子が惚太郎にもたれかかっている。前がはだけ、胸が見えていた。

「佳代子ちゃんも服を直した方がいいよ」

「は、はい」

車は高速の出口を通り、下道へ入る。海へはもうすぐだ。予約した民宿は海のすぐ近くなので、先に車を停めてから海へ行くつもりだっ

た。

「海も久しぶりだな」

窓を開け、流れてくる潮の香りを嗅ぎながら俺は呟いた。

ほどなくして民宿に着き、予約の名前を告げる。チエツクインの間には早かったので車を停めさせてもらい、先に荷物を預けて水着を持って海に向かう。更衣室で着替えビニールシートを広げていると着替え終わった明美と佳代子がやって来て俺と惚太郎は思わず感嘆の声を上げた。

「うん、いいね。二人ともとっても可愛いよ」

明美は青の、佳代子は黄色のセパレートの水着を着ている。この日のために先日買ってあげたものだ。本当はビキニを着せたかったのだが、こんな美少女たちがビキニを着ていたら男どもが寄ってきて仕方ないだろうと思い、露出が少なめのものにしたのだ。それでもスクール水着以外のものを着ているのを見るのは初めてだったので「感動する。」

「しかしこれじゃ水着の面積は関係ないな。これだけ可愛いと男どもが虫のように寄ってきそうだ」

「そうですね。常に傍にいないと危ないですね」

俺たちは交代で海へ入ることにした。お互い妹にぴつたりと張り付き、周りの男どもをけん制するように視線を巡らす。

「お兄ちゃん、顔が怖いよ。せつかく海に来てるのに」

明美が困ったような顔で言う。

「お前と佳代子ちゃんが変な男に言い寄られないようにしないと。お前たちの水着姿が見られるのは嬉しいが、他の男どもにもじろじろ見られるのは気分がよくない」

「今更水着姿見て嬉しいの？毎日裸見てるのに」

「それはそれ、これはこれ。本当はビキニがよかったんだが、家で着てもらおうかな」

「水着を家で着てどうするの？意味ないじゃない」

そんな馬鹿な会話をしながら波打ち際でしばらく遊び、俺と惚太郎

は妹の水着姿を堪能して民宿へ戻ることにした。途中明美たちをじろじろ見る男たちがいたが、わざと腕を組んで歩き、そいつらをけん制する。

「先輩、民宿の裏手、岩場になってるみたいですね」

惣太郎が駐車場から裏に目をやって言う。確かに民宿の建っている場所は崖のように少し高台になっており、裏手は表の海水浴場からは見えにくい岩場になっている。行ってみると岩を下りた先は小さな砂浜があり、ほとんど人影がない。ちよつとしたプライベートビーチのようだ。

「ここならゆつくりできそうだな」

俺たちは足を滑らせないよう注意しながら妹たちの手を引いて岩場を下りた。岩が目隠しとなり人目に着くことがないのを確認した俺と惣太郎は目を合わせて頷き、自分の妹を抱き寄せる。

「お、お兄ちゃん!」

「静かにしている」

水着の中に手をやり柔らかい乳房を揉む。惣太郎も佳代子の股間に手をやっている。

「こんなところでダメだよ」

「だからいいんじゃないか。野外セックス、久しぶりだろう? 外でうんこ漏らしてアナルセックスした時のことを思い出すな」

「バカあ」

「そ、そんなことしたの? 明美ちゃん」

「さすがですね先輩、そこまでさせてたなんて」

「感心しないで。本当に……あつ! 恥ずかしかったんだから」

水着をずらし、オマンコに指を入れてかき回す。妹の体から発情したメスの匂いが漂う。

「しゃぶりなさい」

ガチガチに勃起したペニスを跪かせた妹の前に突き出す。亀頭が柔らかい唇に包まれ、思わず声が漏れそうになる。

「佳代子、俺も」

惣太郎が同じように佳代子にフェラチオをさせる。人目のない岩

場の陰にペニスをしゃぶるいやらしい水音が響く。

「たまらないな、青空の下でもらうフェラチオは」

このまま飲ませようかとも思ったが、せつかくの青姦だ。俺は明美を立たせ岩に手を付かせて後ろを向かせると、水着をずり降りしてアナルにペニスを当てる。

「お、お兄ちゃん、こ、こんなところで」

「こんなところだから興奮するんじゃないか。いくぞ」

胸を揉みながらアナルに挿入する。青空の下、上も下もずらされ全裸に近い状態になった妹の体を存分に堪能する。隣では惚太郎が同じように佳代子のアナルを犯していた。

「あっ！あっ！あっ！ああんっ!!」

肉奴隷中学生の声がハモる。鬼畜な兄たちが思いきり奥を突き、思いのままにザーメンを迸らせる。

「ふああああっ!!」

「イクうっ!!」

可愛らしい声を上げ、明美と佳代子が絶頂する。ペニスを抜き、砂の上に落ちるザーメンを見ながら俺と惚太郎は深い満足感に浸った。

## 隷属の味

民宿にチェックインし、部屋に入った俺たちは、大の字になって畳の上に寝転がった。夏休みシーズンでどこも予約がいっぱいだったが、ここだけ運よく四人部屋が一つ空いていたのだ。

「二緒の部屋に泊まれてよかったですね」

惚太郎が伸びをしながら言う。確かにラッキーだった。これなら四人一緒に楽しむことが出来る。

「二休みしたら風呂にいくか。ここは小さい宿だけど大浴場は中々広くていいらしいぞ」

テーブルに置いてある茶菓子をつまみ、荷物を端に置いて俺が言うと全員が頷いた。俺は尿意を催し、明美にペニスをしゃぶらせる。

「宿の部屋だからこぼすなよ」

妹は頷き、綺麗に俺の小便を飲み干す。こんな場所でも妹を肉便器にしていることが興奮を誘う。今夜は眠れなくなりそうだ。

「じゃあ後でな」

四人で大浴場へ向かい、俺は男子更衣室の手前で妹たちに声を掛ける。混浴ではないのでさすがに一緒に入るといわけにはいかないが、この後風呂上がりの妹たちの体をじっくり鑑賞できると思うと、ペニスがまた硬くなってくる。

「おお。広くていい風呂ですね」

惚太郎が感嘆の声を上げる。確かに宿の大きさにしては立派な浴場だ。俺たちのほかには年配の男が二人入っているだけのようだ。俺たちは彼らから少し距離を取り、岩に囲まれた湯船に浸かる。

「ふう、いい気持ちですね。こんなところで佳代子たちとゆっくり出来るなんて本当にうれしいです。混浴だったらもつとよかったのになあ」

「浴場で欲情か。……オヤジギャグだな」

「本当ですよ、先輩」

タイムリープする前は正真正銘のおじさんだったのだからしょうがない。俺は苦笑しながらゆっくり湯に浸かって運転の疲れを癒し

た。

「お待たせ」

部屋に帰ってしばらくすると明美と佳代子が戻ってきた。民宿の浴衣姿だ。風呂上がりの艶めかしい妹たちを見て思わずぐくりと唾を飲む。惚太郎もまじまじと凝視していた。

「やはり風呂上りはいいな。浴衣姿というのがまたそそる」

「ええ」

俺たちは自分の妹を抱き寄せ、座らせて後ろから浴衣の中に手を入れた。下着を付けていない。ブラはもちろんパンティーもはいていないのだ。

「浴衣一枚でここまで来たのか。いやらしいな」

「だってどうせ脱がすんでしょ？」

「佳代子ちゃんもかい？」

「ええ。佳代子も下着付けてないです」

嬉しそうに惚太郎が答える。

「すっかり肉奴隷として完成したね。お兄ちゃんは嬉しいよ」

浴衣をはだけて胸を揉み、乳首をつまみ上げる。快感に顔を歪ませる妹の唇を奪い、股間にも手を伸ばしてすでに濡れているオマンコに指を入れてかき回す。

「これはお風呂の湯じゃあないよな。こんなにぬるぬるして

「意地悪う」

どんどん硬く勃起する乳首を指で弄びながら舌を絡ませて妹の甘い唾液を味わう。我慢も限界になり、荷物からコンドームを出してペニスに装着する。

「四つん這いになって」

浴衣の裾をまくり上げ、後ろから妹のオマンコを貫く。パンパンと腰の当たる音が部屋に響く。

「ああんっ！」

帯をほどき、露わにした胸を揉みしだきながら快感に酔う。隣では惚太郎が正常位で佳代子を犯していた。歯を食いしばるような惚太郎の表情が妹の膣の気持ちよさを伝えてくる。

「うっっ！」

体をびったりと密着させ、唇を重ねながら惚太郎の腰が大きくビクンと跳ねる。射精しているのがここからでも分かる。よほど気持ちいいのだろう。惚太郎の目には涙が浮かんでいる。佳代子も惚太郎の背中に手を回し、ぎゅつとしがみついている。

「完全に一つになっているな。俺たちも負けていられないぞ」

明美の体を起こし、背面座位でぎゅつと抱きしめる。子宮口を押し上げながら首筋に舌を這わせ、甘い妹の匂いを楽しむ。

「お兄ちゃあん」

震える声で妹が叫ぶ。胸を掴みながら一度腰を引き、一気に子宮口にペニスを突き上げる。

「おおっっ！」

コンドームの中でザーメンが弾ける。同時に妹が空さを反らせ、絶頂を迎える。

「ああんー！」

何度もペニスがしゃくりあげ、射精を続ける。しばらく快感の余韻に浸った後、ペニスを抜いてコンドームを外す。惚太郎も絶頂の余韻でしばらく動けなかったが、ようやく体を起こし、同じようにペニスを抜く。

「ああ……」

明美と佳代子が並んで口を開き、俺と惚太郎がコンドームを逆さにしてザーメンをそこへ流し込む。二人の美少女が兄のザーメンを口に含みじつくりと味わう姿を感慨深く見つめ、ため息を吐く。

「美味しい」

うっとりとした表情で明美が呟く。ザーメンが美味しいとはとても思えないのだが、三年間毎日飲んでいるのだ。本当に美味しく思えても不思議ではないのかもしれない。俺はふとあることを思いつき、惚太郎に耳打ちした。惚太郎は少し驚いたような顔をしたが、すぐ頷いた。

「失礼します」

夕食の時間になり、仲居さんが料理を運んでくる。刺身の盛り合わせ

せと魚介の入った鍋だ。夏に鍋というのもどうかと思うが、こちらには都合がいい。

「いただきます」

明美と佳代子が嬉しそうに箸をつける。無論今はちゃんと浴衣を着ている。仲居さんが下がると俺と惚太郎は顔を見合わせて自分の鍋をつける汁の入った小皿を取って、それを明美たちの小皿に空ける。

「お兄ちゃん？」

不思議そうな顔をする二人に黙ってペニスを突き出す。「え？」と妹たちが目を丸くする。

「しゃぶって」

「い、今？」

「そうだよ」

少し戸惑いながらも明美たちは兄のペニスを銜える。すっかり上手になった二人の舌技にすぐ射精感が高まり、急いでペニスを抜いて空にした小皿ザーメンをぶちまける。

「え？え？」

ザーメンを溜めた小皿を妹たちの前に置き、微笑みながら頭を撫でる。

「これに付けて食べるんだ。鍋も刺身も」

「そ、そんな！」

「お兄ちゃんのザーメン、美味しんだろう？よく味わいなさい」

「もう、本当に変態なんだから」

拗ねたような顔をしながらも、明美は鍋の中の貝を取り、小皿のザーメンにそれを付けて口に運ぶ。佳代子もマグロの刺身をザーメンに付ける。

「美味しいか？」

「う、うん、美味しい」

「本当。さすがに美味しくないかと思ったのに……。私たち舌もおかしくなっちゃったのかな？」

本人も意外そうに明美たちが言う。俺もまさか本当に美味しいと

言うとは思わなかったのだが、明美の言う通りザーメンを味あわせすぎて味覚が変になったのだろうか。

「お兄ちゃんのザーメン、本当に美味しいと思えるようになったんだね。嬉しいよ」

つ惚太郎が感激したように言う。ここまで妹を墮としたんだな、と改めて実感する。けつきよく明美と佳代子は最後まで兄のザーメンに料理を付けて食事を終え、満足そうに「ご馳走様でした」と言って微笑んだ。

「宿の料理人に申し訳なかったかな」

俺はせっかくの料理を自分のザーメンで汚したことを反省して呟いた。ザーメンを出した小皿は当然そのまま返すわけにはいかないので丁寧に洗い、よく拭いて臭いがしないのを確かめた。

「これからはお兄ちゃんが作った料理だけザーメンを付けるようにしましょうな」

「うん」

明美が素直に頷く。俺のザーメンを付けた料理を食べることに何の抵抗もないようだ。

「お兄ちゃんも料理作ってくれる？」

佳代子の問いに惣太郎が「頑張るよ」と言って頷く。それからしばらくして仲居さんが皿を下げに来て、俺たちは礼を言った。布団を敷きましようかと言うので、自分たちで敷くから大丈夫と答える。

「浴衣を脱ぎなさい」

布団を敷き終わり俺が言うと、明美と佳代子は頷いて帯をほどく。するりと浴衣を落とすと、下着を付けていない二人はすぐ全裸になった。しげしげと美しい二人の美少女の裸体を眺め、前から後ろから艶やかな肌を撫でて感慨にふける。兄に犯されるために生まれてきた二人の妹。この美しい肢体の全てが俺と惣太郎のためにあるのだ。何と幸せな事だろう。

「二人で愛し合いなさい」

「え？」

俺の言葉に明美と佳代子が顔を見合す。

「二人で愛撫してお互いをイカせるんだ。お兄ちゃんにしてもらったことを相手にしてあげて」

「私たちで……」

明美と佳代子が見つめ合い、息を呑む。二人は布団の上に向かい合って座り、そつと抱き合つて唇を重ねた。そのまま明美が佳代子を押し倒し、背中から手を動かして胸を揉む。佳代子は明美の股間に手をやり、オマンコに指を入れてかき回した。

「んんっ！」

明美の顔が歪み、荒い息を吐いて佳代子の乳首に吸い付く。佳代子の顔もまた快感に歪んだ。

「ああっ……はあっ」

お互いの股間をまさぐりながら、二人の肉奴隷中学生が相手を悦ばせようと絡み合う。その光景に俺と惚太郎は息を呑んで見入った。

「佳代ちゃん、綺麗」

「明美ちゃんもすごく可愛いよ」

激しく舌を絡めながら二人の手が相手の体を撫でまわす。明美が横向きにした佳代子の片足を持ち上げ、自分の股間を佳代子の股間に押し当てる。貝合わせなど教えた覚えはないのだが、肉奴隷としてのメスの本能が快感を得る術を自然に取らせているのか。

「はあっ！佳代ちゃ……」

勃起したクリトリスが糸を引いてぶつかる夢のような眺めに食い入るように目を凝らす。二人がほぼ同時に股間に手を伸ばし、お互いのクリトリスを思いきり指でつまむ。

「ああ——っ!!」

二人の体が痙攣し、がくりと布団に倒れこむ。同時にいき、荒い息を吐いて手を絡ませる姿にこちらももう我慢できず、襲い掛かるような勢いで二人を抱き起す。俺は明美の、惚太郎は佳代子のアナルにペニスを押し当て一気に奥まで沈める。

「ふああああっ!!」

背面座位で二人の体を向かい合わせ、アナルを突き上げながら近づく。兄に尻を犯されながら肉奴隷の妹がオマンコを擦り合わせ、抱き

合いながら唇を重ねて舌を絡ませる。四人が一つに繋がり、自分の体と心が皆と溶けあう感覚に最高の悦びが湧き上がる。

「お、おおっ!!」

ぐうつと射精感が高まり、愛しい妹の直腸にザーメンを思いきりぶちまける。反対泡では惚太郎が佳代子の直腸に射精しているのが感じられた。自分のザーメンが明美を通じて佳代子にまで注がれているような錯覚がする。俺たち四人が本当に一つに溶けたような幸せな感覚に、頭がくらくらする。

「先輩、俺たち……」

惚太郎が息を切らせながらぼうつとした顔で呟く。

「惚太郎君も感じたか？俺たちが一つに溶けたような……」

「ええ。二つの近親相姦が一つになったような」

「私も感じた。佳代ちゃんを通じて佳代ちゃんのお兄ちゃんのザーメンが注がれるみたいなきがして」

「私もだよ。明美ちゃんと抱き合って、明美ちゃんのお兄ちゃんの熱いザーメンが子宮に注がれるような感じがした」

「俺たちは本当に一つになれたんだな。素晴らしいよ。明美と佳代子ちゃんがお兄ちゃんと完全に一体になれたおかげだな」

「やっぱり心の底から求め合う近親相姦は凄いですね。俺、本当に幸せです」

俺たちは笑い合い、四人で乱れるように絡み合って唇を重ねた。明美や佳代子は勿論、惚太郎とさえキスしたような気がした。俺たちは布団の上で一つの生き物と化し、眠りに落ちるまで肌を重ね、互いの体をまさぐりあった。

「昨夜は夢のようでしたね」

民宿をチェックアウトし、つ帰りの車の中で惚太郎が呟く。彼は今後部座席で佳代子の胸をまさぐっていた。

「本当だな。これからも妹と濃密な時間を過ごそうな」

俺も助手席の明美のシャツをずり上げ、左手で胸を揉みながら答える。ブラを付けていない明美の乳房は丸見えになっており、明美はちらちらと周囲を気にするように視線を外に向けていた。

「お兄ちゃん、見られちゃうよお」

顔を赤くし、体をもじもじさせながら妹が泣きそうな声を出す。

車は一般道を走っている。しかもそこそこ混んでいてスピードはあまり出ていない。

「大丈夫だよ。完全に隣に來ない限りまず他人の車の中なんて見れないさ。お兄ちゃんは前を見て運転してるから大丈夫。バックミラーも気にしてるし」

この時代はまだそれほどオートマ車が普及してなく、まして中古のこのオンボロ車だ。当然マニュアル車なのでスピードの増減でギアチェンジが必要になる。俺は右手でハンドルを握り、左手はギアを変えるときはシフトを握り、ギアを変える必要がない時間は妹の胸を揉む。

「明美ちゃんの胸がシフトレバーみたいですね」

惚太郎が笑いながら言う。そのうち本格的に渋滞してきて車が止まることが多くなった。さすがに隣から見えそうなので胸から手を放し、シャツを下ろさせる。しかしその代わり別の悪戯心が疼き出した。俺は周りを見て大柄者がいないことを確認し、ズボンのチャックを下げる。

「明美、しゃぶりなさい」

「ええ!? だって周りに車が」

「大丈夫。トラックとか運転席が高い車じゃないと簡単には見られないよ」

俺は周囲の車がこちらにを見ていないのを確認して妹の頭を自分の股間に押し当てる。明美は困惑しながらも素直に俺のペニスを銜え、舌を這わせる。

「いいぞ」

停車している時には頭を押さえてしゃぶらせ、車が動くとき頭を持ち上げてシフトを変える。そんなことを続けるうちようやく高速の入口に着いた。

「高速じゃあんまり気持ちよくなると運転に集中出来なくて危ないから、それまでにイカせなさい」

ズボズボと頭を上下させ、一気に射精に導く。ぎゅつと頭を押さえ、口内に思いきり吐き出し、すつきりした気分で高速に入る。しかし高速も混んでいた。これなら急いで射精しなくてもよかったかもしれない。

「混んでますね。でも俺たちは渋滞でトイレに行けなくても大丈夫ですね。お互い小便なら飲ませればいいんですから」

俺を真似て佳代子にフェラさせている惚太郎が言う。

「違くない」

俺は苦笑して答えた。簡易トイレよりずっと気持ちいい口便器があるのだ。まあ大がしたくなったら困るが。

「疲れたなら寝ていいぞ。着いたら起こすから」

俺は延々と続くブレーキランプの光を見つめながら言った。

家に着いたのはもう夜だった。俺は惚太郎と佳代子を家の前で降り、母にお土産を渡して早々にベッドに入った。さすがに疲れていた。翌日は昼近くまで寝ていたが、妹はさらに寝坊だった。俺は軽く食事を摂り、それから妹のための食事を用意する。サラダとベーコン入りのスクランブルエッグだ。妹を起こしに行くと、寝坊したことを謝りながらも通り俺の前で全裸になる。

「今日も肉奴隷の明美を滅茶苦茶に犯してください」

肉奴隷になった日から毎日言っているセリフを口にした明美にペニスをしゃぶらせる。そして射精の寸前に口からペニスを抜き。朝一の濃いザーメンをサラダの上にドレッシングのように振りかける。自分でもペニスをしごき、スクランブルエッグにもザーメンを散らした。

「あ……」

「こないだ言った通りお兄ちゃんの料理にはザーメンをかけるよ。さ、召し上がれ」

「うん」

妹が上気した顔で迷いなくサラダに箸をつける。ドロドロのザー

メンがかかったレタスを持ち上げ、そのまま口に運んでよく咀嚼する。続いてきゆうり。パリパリと野菜が噛まれる音が響く。

「美味しい?」

「うん、お兄ちゃんのザーメンサラダ、美味しいよ」

嘘を言っている風ではない。本当に味覚がおかしくなっているのかもしれない。しかし母が作るいつもの料理も美味しいと食べているのだ。俺のザーメンだけが特別美味しいと思うよう刷り込みされているのか。不思議な気分でザーメンに塗れた料理を食べる妹を見つめる。

「どうしたの?お兄ちゃん」

じつと妹を見つめる俺に明美が小首をかしげる。

「何でもないよ。お兄ちゃんのザーメンを美味しいって言ってくれて嬉しいな、ってな」

「本当に美味しいよ。私、舌も完全に肉奴隷になれたんだね」

「そうだな」

ザーメンのかかったトマトを頬張り微笑む全裸の妹を見つめ、俺の子間で再びペニスが硬く勃起していった。

## コスプレ美少女戦士

それからさらに時が流れ、明美と佳代子は高校生に、惚太郎も志望校に合格して大学生となった。さすがに受験期間中は妹を犯すのを控えたのだが、妹の方から息抜きと称して求めてくることもよくあり、また安全日の生セックスは二人とも我慢することが出来ずに激しく愛し合った。両方とも受験生だった惚太郎と佳代子も自重していたと言っていた。やはり安全日セックスはやめられなかったらしいが。一発で志望校に入った惚太郎も大したものだが、より大変だったのは佳代子だっただろう。元々佳代子の成績は明美よりも少し低かった。それを明美と同じ高校に入るために必死に頑張ったのだ。三人とも無事合格した時は本当に嬉しくて、それぞれの家族がお祝いのとは別に三人に少し豪華なレストランで食事をおごった。無論その後で妹には大量のザーメンもプレゼントしたわけだが。

「先輩、コミケって知ってます?」

明美たちが合格してから半年が経ち、秋が深まってきたある日、俺は惚太郎に初めて会った喫茶店に呼び出されコーヒーを啜っていた。

「知ってるよ。同人誌即売会だろ?」

知ってるどころの話ではない。前世では十年以上ずっと一般参加していたのだ。そういえば初めて行ったのは今くらいの歳だったか。

「今度の冬コミに参加してみませんか?」

「何だ、エロ同人に興味があるのかい?」

「エロって決めつけないでくださいよ。まあそうですけど」

惚太郎が苦笑する。

「妹以上のズリネタがあるとも思えないけどな」

「それは勿論ですけど、そこはそれというか。知ってます?今人気のアニメ」

「美少女戦士か」

「ええ。久々にアニメにはまりました」

「俺も見てるけどね。確かに面白いよな」

今爆発的な人気を誇るオタクで知らないものはいないであろう美

少女戦士のアニメ。前世でも大ヒットしたのを覚えている。男性向け同人はこの頃このアニメが席卷していたはずだ。

「佳代子と明美ちゃんにですね、あれのコスプレをしてもらいたいと思ってまして」

「コスプレ？でも衣装は？」

この時代、まだ完成したコスプレ衣装を売っているところなどほとんどなかったはずだが。

「佳代子は裁縫が得意なんですよ。あいつに作らせようかなって」

「へえ。そいつはすごいな。でもなあ、一般参加するんだろ？」

「一般……ああ、はい」

コミケでは売り手も買い手も「参加者」と表現する。売る方はサークル参加者、買う方は一般参加者。同人誌を買う側も「お客様」ではないのだ。まあ企業ブースが出来てからはそうでもなくなった感はあるが。

「コスプレするだけならいいけど、本も買うつもり？」

「そうですね。せっかくですし」

「ある程度回るつもりなら朝早く並ばないといけないぞ。何せものすごい数の人間が来るからな」

俺の記憶では今は晴海が会場だったはずだ。何年か後に幕張メッセに会場が変わり、それからまた晴海に戻ってくる。この頃ほとんかく入場が大変だった。十万人以上が列に並び、会場に入るだけでも時間がかかった。いつだったか入場が午後2時にまでなつて問題になったことがあつたはずだ。徹夜組が問題になったりもした。ビッグサイトが出来てそちらに移つてからは大分入場がスムーズになつた覚えがある。

「詳しいですね。先輩参加したことが？」

「いや、聞いた話だよ」

少なくとも今の人生ではまだコミケに行ったことはない。前世の記憶だが、あのしんどい朝の行列に並ぶのは正直勘弁してほしかった。この頃はまだ「○○のあな」のような店舗もなかったので、同人誌を手に入れるにはコミケのような即売会に参加するしかなかった。

だから人気サークルなどはまた行列に並ばなければならなかった。いつだったか壁サークルの行列に並んだらそこでだけで閉幕時間になつてしまったことがある。

「今から冬コミに間に合わせるのは大変だろう？ 来年の夏コミにしないか？ 出来ればサークル参加で行きたい。あの行列に並ぶのはどうもな」

「サークル参加って先輩、同人誌書くんですか？」

「いや、俺じゃなくて明美に書かせる。あいつはけっこう絵が上手いんだ。俺は絵はからきしダメだからな。小説ならまだしも」

「へえ、明美ちゃんにエロ同人を？」

「いや、一般向けだよ。男性向けサークルは数が多くて初参加じゃ落ちる可能性が高いし、マナーの悪いカメコも多いだろう。明美や佳代子ちゃんをあいつらの目に触れさせるのは出来るだけ避けたい」

「そうですね。俺も自分が見たいだけですから」

「とりあえず今度の冬コミは参加申込書を貰いにだけ行こう。それなら朝から並ぶこともない。本が買いたいなら付き合うよ」

「ありがとうございます」

そういうわけで年末、俺と惚太郎は晴美のコミケ会場に向かった。一般入場が落ち着いたであろう昼頃に着き、何とか並ばずに入ることが出来た。俺は今更同人を買う気もなかったので、参加申込書だけを貰ってぶらぶらとしていたが、惚太郎はあらかじめカタログを購入して目星のサークルを見て回っていた。

「相変わらずすごい人だな」

東館の外をぞろぞろ歩く人の群れを眺め、缶コーヒーを飲みながら呟く。前世ではあの人波の中にいたのだ。懐かしい気持ちと、帰るまでにへとへとになって疲れた記憶がない交ぜになる。

「お待ちせしました」

紙袋を下げて惚太郎が待ち合わせの場所へやって来る。この寒いのに額には汗が浮かんでいた。館内は人いきれでさぞ蒸していただろう。

「お目当てのものは買えたかい？」

「ええ、いくらかは。売り切れてたのも多かったです」

「来たのが遅かったからな。惚太郎君だけ早く来てもよかったのに」

「いえ、先輩の話を聞いてたら行列に並ぶのも億劫だと思って。正解でしたよ、この人の数を見てると」

「これがコミケだからね。申込書は貰ったから帰ろうか」

「ええ」

家に戻り、俺は明美に同人誌を書くよう頼んだ。最初は渋っていたが、例のアニメは妹も見ていたので何とか承諾させる。冬コミの申し込みは夏からあまり日がないので夏コミが終わってから一週間くらいで締め切りになるが、夏コミの申し込みは少し時間がある。ある程度妹が書くものの用途が立ってからでも大丈夫だろう。どちらにせよ初参加の弱小サークルが抽選で受かる可能性はそれほど高くないだろうが。

それからしばらくはいつもの生活が続いたが、大きく変わったことが一つあった。それは俺が大学で医学部の学生と親しくなり、彼の家が産婦人科の医院だったため、彼を通してピルを購入できるようになったことだ。本来は医者からの許可が必要なのだが、彼の親は息子に甘く、女癖が悪い彼が問題を起こすよりはとかなりルーズにピルを渡していたのだ。俺はそのおこぼれに預かって、まとまった量のピルを彼から手に入れた。俺はそれを惚太郎にも渡し、そのおかげで俺たちは安全日以外でも妹と生セックスが出来るようになった。毎日妹のオマンコに中出し出来る幸せに俺と惚太郎は大喜びした。

「へえ、上手いもんだね」

年が変わり、春めいてきたその日、俺たちは佳代子を作ったコスプレ衣装を見せてもらっていた。手造りにしてはよく出来ている。後には実際に着てみてサイズを調整するだけだ。惚太郎も手伝ったらしいが、ほとんど佳代子一人で作ったそうだから大したものだ。

「明美ちゃん大丈夫？きついところない？」

「うん、ぴったりだよ。すごいね佳代ちゃん」

衣装を着た二人があちこち確認しながら楽しそうに会話する。明美のコスプレは水星、佳代子は火星だ。主役がいないのもどうかと思ったが、どちらにせよ二人しかいないのだ。それに他人に見せるのが目的でもない。

「やっぱりスカートが短いよね。これでコミケ行くの恥ずかしいなあ」

明美がスカートのスそを引っ張りながら言う。原作に忠実に作ればこうなるのは仕方ない。が、あまり他の男に見られたくないのも事実だ。やはり家だけで着せた方がよかつたか。しかし惚太郎がコミケ参加したがつているからやむをえまい。せつかく同人誌も作ったのだ。俺はベタ塗りを手伝ったくらいだが。

「抽選に落ちないといいですけどね」

「そろそろ結果が来るんだつたな」

美少女戦士になった二人を見ながら言う。顔が似ているとは言えないが、二人とも本当に美少女なのでよく似あっている。明美には水色のウィッグも被せてある。短いスカートから覗くすなりとした足を見ていると、むらむらとした気持ちが高ぶってきた。

「美少女戦士と言えば敵に襲われるシチュはお約束だな、惚太郎君？」

「ええ。二人があんまり可愛いから妖魔に心を奪われちゃいましたね」

俺たちはにやつきながら妹たちの背後に回り、胸を掴んで揉みしだく。

「あ、ダメ、お兄ちゃん。今衣装着てるから」

「皺になつっちゃうよ」

「俺たちは妖魔に操られているのだ。美少女戦士を犯せと命令されているんだよ」

スカートの中にも手を伸ばし、触手のようにうねうねと股間をさする。

「もう、本当に変態なんだから！水でも被って反省しなさい！」

「お兄ちゃんもいい加減にしないと折檻よ！」

「ふふ、中々なりきつてるじゃないか。ならこちらも」

「ここからは18禁バージョンだ。よいこのみんなは見ちゃだめだぞ」

悪ノリしながら腋から手を入れ、直接乳房を掴む。乳首を指で転がしながら首筋を舐めて耳を甘噛みする。

「お、お兄ちゃん」

妹の声が甘いもの変わる。パンティーを下ろし、ズボンの中で窮屈にしていた息子を解放してオマンコに押し当ててやる。

「お前の聖なるエナジーを吸いつくしてやる。覚悟するがいい」

ペニスをずぶずぶと沈みこませ、妹の片足を持ち上げてぐいぐいと突き上げる。太ももをさすりながら美少女戦士になった妹の膣内の感触に酔いしれる。

「いいぞ。お前のエナジーは実に美味だ。代わりに妖魔のどす黒いエナジーを注ぎ込んでやる。色は白いがな」

「もう、バカあ」

子宮口をノックされながら明美が甘い声を漏らす。背中の中チャックに手をかけ一気に下ろすと、肩から衣装を一気に脱がす。ブラを付けていない胸が露わになり、硬くなった乳首を思いきりつね上げた。

「ああんっ！」

明美が身もだえして顎を跳ね上げる。腕を通させて完全に上を脱がすとスカートのホックも外し、全裸に剥く。

「エナジーが尽きたようだな。一気にとどめをささしてやろう」

悪ノリ演技を続け、変身が解けて全裸になったような言い方をすると、明美を四つん這いにして後ろから激しくピストン運動を開始する。

「あっ！あっ！あっ！」

「気持ちいいだろう。さあ、闇に堕ちるのだ、〇ー〇ー〇ーキユ〇ー」

この頃はもう闇堕ちという言葉があったかな、などと止めどもないことを考えながら一気にスパートする。胸を鷲掴みにして上体を起こし、子宮口を突き破るような勢いで亀頭を押し当ててやる。

「うおおっ!!」

ぼびゅっ!と音が聞こえたような気がした。勢いよくザーメンが子宮に飛び散り、全身が最高の快感に震える。

「お兄ちゃああん!!!」

明美も全身をガクガクと震わせ絶頂を迎える。数えきれないくらい繋がってもいつでも妹のオマンコは最高だ。これが近親相姦の素晴らしさだ。

「ふうう」

思いのまま一滴残らず射精し、満足感に包まれてペニスを抜く。やはり中出しは堪らない。ピルを売ってくれた友人には本当に感謝しなければならぬだろう。

「いやあ、迫真の演技でしたね。思わず見入っちゃいましたよ」

惚太郎が感心したように言う。その前にはオマンコから大量のザーメンを逆流させた佳代子が前のめりに突っ伏していた。明美とのセックスに夢中で気付かなかったが、すでに中出しをしたようだ。佳代子の衣装はほぼ剥かれ、全裸に近い状態になっている。

「せっかくのコスプレだからな。文字通りのコスチューム・プレイだ」

「本当ですね。これからもいろんな衣装作ってやりたいですね。コスチューム・プレイ」

激しく絶頂し荒い息を吐く二人の美少女戦士を見下ろして俺と惚太郎が笑う。その後せっかく作った衣装を乱暴に脱がされて佳代子が怒り、二人で平謝りしたのはご愛というものだった。

「あっ!あっ!いいっ!」

ビキニアーマー姿の明美と佳代子がバックからオマンコを突かれてよがり声を上げる。結局あの後コミケの抽選に落ち、俺たちはサークル参加が出来なかった。惚太郎だけが一般参加で同人を買ってきたが、俺は行かず、コスプレさせた明美を家で犯していた。他の男に見せずに済んだので却ってよかったと思っただが、せっかく作った同人

誌を売れずに明美は少し残念そうだった。大した量を刷ったわけではないが、とりあえず惚太郎が貰ってきた申込書で次の冬コミにも申し込んでみることにしようと思う。

「お兄ちゃ……あつー！」

しかしコスプレさせた妹を犯す快感に目覚めた俺と惚太郎は佳代子にいろんな衣装を作ってもらうことにした。今はゲームの女戦士のビキニアーマー姿をさせている。こんなことを言うのは野暮だと分かっているが、こんなに露出の多い格好でアーマーの意味があるかと思う。

「くく、惨めなものよな。王国で知らぬもののない戦士アケミがこのようなザマとは。民が見たらなんといいかな？」

「お、おのれ。このような辱めをうけるくらいならいつそ殺せ！」

ノリノリで演技をする俺と明美をにやにやしながら惚太郎が見つめる。すでに膣内射精を済ませ、佳代子にはあはあと嵐息を吐いて布団に四つん這いになっていた。

「いつもながら見事な演技ですね。コスプレAVとして売れそうですよ、先輩」

「ふふ、儂の子種汁をたっぷり注いでやるぞ。魔族の仔を孕むがいい」

「や、やめろ！中にだすなあ！」

勇ましいセリフだが口調は甘くとても芝居としては成り立っていない。まあこの状態で本気の演技をしろというのが無理な話か。

「さあくらえー！」

「ああ——っ!!」

兄の熱いザーメンを子宮に受け、妹が悦びの声を上げる。性の快感に堕ちた女戦士を見つめ、俺は硬いままのペニスをもう一度突き刺し、二度目の膣内射精へ向けて腰を振った。

## 偽りの彼氏

高校生になった明美と佳代子は校内でも話題になるほど人気者になった。告白やラブレターをもらうことはしよっちゅうで、その度にお断りの返事をするのが大変だと家で零している。目を引く美少女だから仕方ないが、街中でのナンパも後を絶たないらしく、俺と惚太郎は可能な限り妹の外出にはついて行くように心がけた。

「そうはいつでも大学生にもなると中々忙しいんですね」

全裸の佳代子を膝に乗せた惚太郎が乳首を指で弄びながら言う。背面座位でさつき膣内射精したばかりだ。佳代子はうっとりとした表情で惚太郎にもたれていた。

「まあね。俺も出来るだけ明美のために時間を作ってはいるけどね」

同じように明美を膝に乗せた俺が胸を揉みながら答える。こちらもお先ほど子宮にザーメンを注ぎ込んだばかりだ。

「いつも先輩にはお世話になってます」

俺と惚太郎どちらかが付いていけるように、明美と佳代子には出来るだけ一緒に行動してもらおうようにしている。最近バイトを始めた惚太郎は中々時間が作れないようなので俺が付いていくことが多い。俺は去年から母の名義で株の売買を始めていた。前世の記憶あるので伸びる企業や業種が分かっているため、儲かる株を買ってそれなりの利益を出しているのだ。もうすぐ二十歳になるのでそうしたら自分名義の取引にするつもりだ。だからバイトしなくてもある程度小遣いに余裕はあったのだ。

「惚太郎君も親の名義で株を始めたらどうだい？教えてあげるよ」

「俺の親は株とか投機が嫌いなんですよ。二十歳になったら自分でやるつもりですが」

しかし俺の記憶ではもうすぐバブルが弾け、株価は暴落するはずだ。俺も徐々に売却を進め売り抜ける算段を付けている。しかし未来のことを断言してしまうわけにもいかない。

「まあ出来るだけ俺が付いていくよ。車で移動すればナンパもされ

にくいし。学校の男子は防ぎようがないけど」

「でももうかなり断ってるんだろ？男子もさすがに諦めてるんじゃないか？」

「うん、だけど誰の告白もみんなすぐ断ってるから、最近私たちがレズだって噂が立つちやつてるの。困っちゃう」

明美がオマンコから逆流したザーメンを指で掬い取り、舌で舐めながら言う。

「いいじゃないか。レズだつてことにしとけば男どもがよつてこないだろ」

「それが男の良さを教えてやるなんて言ってくる男子もいるの。好きな人がいるつて言つてもいい？」

「そりゃ構わないさ。実のお兄ちゃんとは言えないだろうけど」

「ごめんなさい。私、こないだそう言つちやつたんです」

佳代子が俺の方を見ながら申し訳なさそうに言う。

「え？お兄ちゃんと付き合つてるつて言つたのか？」

惚太郎が驚いて佳代子の顔を見つめる。

「まさか！彼氏がいるつて言つただけ」

「ああ。ならいいじゃないか。事実だし」

「でもその子しつこくて。疑つてるみたいなんです。彼氏を見せてくれつて」

「ふくん、お兄ちゃんが言つてガツンと言つてやろうか」

「でもその子、中学の時から一緒に、お兄ちゃんの顔知つてるの」

「それじゃ兄妹で愛し合つてるのがバレちゃうな」

惚太郎が思案顔で佳代子の頭を撫でる。

「そうだ、先輩、佳代子の彼氏つてことでそいつに会つてくれませんか？」

「俺が？」

「ええ。佳代子、そいつ、先輩のことも知つてるのか？」

「明美ちゃんとはずっと違うクラスだったはずだし、知らないと思う」

明美と佳代子は中一の時は同じクラスだったが、二三年は別になつ

た。その男子はその時一緒だったのだろう。

「なら大丈夫でしょう。ついでに俺が明美ちゃんの彼氏つてことにして、男どもを黙らせましょう」

「お互い相手の妹の彼氏になるわけか。知らない中じやないし、不自然ではないだろうが……惣太郎君はともかく俺が佳代子ちゃんの彼氏つていうのは信じられないんじゃないか？」

惣太郎は中々のハンサムで、高校の時から結構モテていたと聞いている。妹一筋の彼は他の女には目もくれなかったので、泣いた女生徒も多かっただろう。佳代子と並べば傍目には美男美女のカップルに見える。

「そんなことはありませんよ。先輩、この間うちの学際に来たでしょう？あの時同じサークルの女子が何人か先輩を紹介してくれと言われたんですよ。先輩自覚ないかもしれませんが結構モテてますよ」

「でももう先に君がフってるんだらう？その子たちは」

「まあそういう子もいますがね。でも興味のない男を紹介してくれなんて言いませんよ」

しかし実はそうなのだ。俺は高校の時に一度、大学に入ってから二度、女子から告白されていた。暗に彼女がいると匂わせてお断りしたのだが、前世の自分では全くありえなかったことだ。明美を口説き落とし肉奴隷にしたことが自信になり、それが態度に表れて少しは頼もしく見えたのかもしれない。

「佳代子だつて先輩が彼氏だつて自慢できるだらう？」

「勿論ですよ。クラスの男子なんてグウの音も出ませんよ」

「そう言ってくれると嬉しいけどね」

結局、後日俺と惣太郎は明美と佳代子の彼氏披露ということ二人の高校の男子に会わされることになった。散々仲のいいところを見せつけキスマスまでして見せたので、流石に彼らも諦めたようだった。

「これでレズとかいう噂も否定出来たし、よかったな」

家に帰り、やれやれと一息ついた俺はジュースを飲みながら妹に近づく男子を追い払えたことにホッとした。と、居間に入るなり服を脱

ぎだした妹がじつと俺を見つめる。どこが不機嫌そうな顔だ。

「どうした?」

「お兄ちゃんって、結構モテるの?」

「は?」

「ほら、佳代ちゃんのお兄ちゃんがこないだ……」

「ああ、あれか。俺も意外だったけど、モテるってほどじゃないだろ。まあ告白は何回かされたことあるが」

「ふくん」

「何だ?お兄ちゃんみたいな変態は明美以外相手にされないと思っただか?」

「そうじゃないけど……」

全裸になった明美が俺に抱きつき、胸に顔を押し付けてくる。

「さつき佳代ちゃんとすごいイチャイチャしてたね」

「そりやお前のとこの男子に見せつけるのが目的だったんだからお前だって惣太郎君とイチャイチャしただろ」

「私には演技だもん」

「俺だって……まあ完全に演技ともいえないか。佳代子ちゃんとは何だかんだ長い付き合いでそれなりのことをやってるからな。でも今更何だ?急にそんなこと言いだして」

「お兄ちゃん、他の女の子よエッチしたこと無いの?」

「佳代子ちゃんだけだよ。それだってオマンコはしてない。お前だって知ってるだろ」

「私や佳代ちゃん以外の子としたくならないの?」

「ならないよ。お前はお兄ちゃんや惣太郎君以外としたいのか?」

「そんなわけないでしょ!」

明美がますます強く抱き締めてくる。そこで俺はようやく分かった。明美は焼きもちを焼いているのだ。俺が意外にモテると聞き、さらに佳代子と必要以上にいちやついたように見えて自分以外の女の子に目移りすることを怖がっているのだ。何と可愛らしいことか。俺は明美が焼きもちを焼いてくれたことに嬉しくなり、頭を撫でる。

「お兄ちゃんの全ては明美のものだよ。分かっているだろう?佳代子

ちゃんは少し特別だけど、他の女の子にお兄ちゃんが気をやることな  
んかないさ」

「本当？私に飽きたりしない？」

「お前を幸せにするって約束したろ？そんなことは絶対でない」

「お兄ちゃん」

唇を重ね、そのまま畳の上に妹を寝かせる。全身をまさぐり、胸や  
股間を舐めて妹の性感帯を刺激していく。

「ああっ！お兄ちゃん！！」

ちなみに明美と佳代子はパイパンだ。俺と惚太郎が定期的に陰毛  
を安全カミソリで剃っている。無毛のオマンコにむしゃぶりつき、ク  
リトリスを甘噛みして小陰口の中に指を入れてかき回す。愛液がと  
めどなく溢れてきてそれを舌で掬い取る。

「はあっ！んっ！」

すっかり濡れそぼった秘部に硬くなったペニスを押し当てる。上  
気した妹の顔をじつと見つめながら腰を押し込む。

「愛してるよ」

子宮口まで一気に貫き、熱くなった妹の頬を優しく撫でる。荒い息  
を吐く妹の目に涙が浮かぶ。

「犯して。お兄ちゃん、明美をいっぱいいっぱい犯して」

「ああ」

胸を揉みながら一心不乱に腰を振る。ぐちゅぐちゅといういやら  
しい水音が響く。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

「明美っ！」

ずーん、という深い快感が股間から背中へ走り、腰がビクン、と跳  
ねる。妹の体をきつく抱きしめたまま、俺は大量のザーメンを子宮の  
中へ吐き出した。

「ああ——っ！！」

ビクビクと体を震わせ明美がイク。しかし俺の興奮はまるで収ま  
らず、射精を終えた後も激しく腰を振り続ける。

「ううっ！凄いや！まだまだ出すぞ、明美！」

「出してっ！明美の肉便器子宮、お兄ちゃんの熱くて濃いザーメン  
でいっぱいに満たしてえっ!!」

膣がペニスに絡みつき、さらなる射精を促す。俺は愛する妹を抱き  
しめながらそのまま何度もザーメンをぶちまけた。

## 本当の結婚式

大学を卒業した俺は思惑通りそこそこいい企業への就職を果たし、バブルが弾ける直前に株を全て売却かなりの利益を得ることに成功した。仕事に忙殺されることを避けるためがむしやらには働かず、前世の記憶を武器に上手く立ち回ることを心掛けた。その結果目立った出世はしないものの社内ではある程度の評価を得るという理想的な立ち位置を獲得し、妹と過ごす時間を捻出することが出来た。

「そろそろ先のことを考えたいんだ」

居酒屋で差し向いながら俺はそう惚太郎に切り出した。惚太郎も大学を卒業して今年就職している。

「先と言いますと？」

「会社にうるさく付きまとう女がいてね。彼女がいると言って相手にしていないんだが、信用してないようで諦めてくれないんだ」

「先輩、金持ってますからね。そういう女が寄って来るんじゃないですか？バブルが弾けてちやほやされてた女が焦ってるって聞きましょよ」

「俺が株の売却で利益を得たなんて君くらいしか知らないはずだよ。会社でも目立たない方だと思っただが」

「余裕がある人間は見た目で分かるんですよ。女はそういう嗅覚が鋭いですからね」

「いつそ結婚しちやええば諦めると思っただがね」

「結婚って明美ちゃんど？」

「そうしたいんだけど法的に妹とは結婚できない。事実婚という形で知り合いのいないところで暮らすのもありだが、安定した生活のためにはそれも難しい。それは君も同じだろう？」

「そうですね。今の仕事を辞めて田舎に引っ越すなら佳代子と暮らすことも出来ますが、不景気になった今じゃリスクが高いですもんね」

「それでだ、都心からは少し離れるけど、いいマンションがあるん

だ。バブルが弾けて不動産の価格もガタ落ち

したからね、そこを二部屋買おうかと思ってるんだけど」

「マンションを二部屋？一括ですか？」

「ああ。一括ならさらに安くなる。不動産会社もまとまった金が欲しい時だからね」

「豪勢ですね、このご時世に」

「こういうご時世だからさ。この時のために株を売って金を作っておいたんだからね」

「先輩、バブルが弾けるのが分かってたんですか？」

「異様な好景気はいつか弾ける。歴史を知っていれば予測ができることさ。運よく弾ける前に売却できたからよかったよ」

実際は前世の記憶のおかげなのだが、それを口にするのではないだろう。

「それで本題なんだけど、そのうちの二部屋を貸すから一緒に住まないかい？新婚夫婦として」

「し、新婚!？」

「ああ。明美と佳代子ちゃんは来年短大卒業だろう？明美は就職させないでそのまま結婚させたいと思ってるんだ。君さえよければだけど」

「俺さえって、まさか！」

「ああ。惚太郎君と明美が結婚するんだ。表向きにはね」

「なるほど。そして佳代子と先輩が結婚するってわけですね」

「そういうこと。同じマンション、それも同じ階の部屋を買うつもりだからね。近くに住んでいた方が何かと都合がいいだろう？お互いに」

「表向きは相手の妹と夫婦になり、実際の夫婦生活は妹とするわけか」

「勿論君と佳代子ちゃんが良ければの話だけど」

「佳代子の問題ありませんよ。先輩に好意を持っていますからね。悔しいですが、俺と同じくらいに」

「それは流石に言い過ぎだろう。あくまで明美と一緒に肉奴隷に

なったから、ある程度は好きでいてくれるだろうが、佳代子ちゃん  
は君のものさ」

「結婚してみれば分かりますよ。先輩は妹には絶大な信頼を得てま  
す」

「それじゃ問題は君の方かな？」

「いえ、佳代子と堂々と暮らせるのなら大歓迎ですよ。他の男なら  
嫉妬で気が狂いそうになるでしょうが、先輩なら許せちゃいます。俺  
自身が先輩に心酔してるからなんでしょうね」

「どうも俺を過大評価してるみたいだね。惣太郎君の方が女性にも  
モテるだろうに」

「他の女にいくらモテても意味ないですよ。俺は佳代子さえいれば  
いいんですから。先輩だってそうでしょう？」

「ああ。じゃあそういうことで。一応場所を確認するかい？」

「いえ、お任せします。でも俺は一括じゃ払えませんから賃貸とい  
うことでお願います」

「一応家賃は貰う形にするけど、ほとんど只同然でいいよ。自分の  
部屋の分の固定資産税分と共益費だけ払ってもらえれば」

「いや、それじゃいくら何でも申し訳ないですよ」

「構わないよ。惣太郎君が近くに来てくれることで俺も助かる。偽  
装とはいえ実際の夫婦で対応しないといけない場面もあるだろうし  
ね」

「ありがとうございます。それじゃお言葉に甘えます」

俺たちは大まかな日程を話し合つて、妹たちにも話をした。そうし  
て半年後、俺と佳代子の結婚式をすることが決まり、その一月後に惣  
太郎と明美の結婚式をすることとなった。

「いいところが見つかりましたね」

惣太郎が周囲を見渡して呟く。ここは少し町から離れた山間の場  
所にある教会。常駐する聖職者がいなくなり数年前から使われなく  
なったそうで、普段は閉鎖されている。建物を管理している不動産会

社の社員が大学の知り合いの兄で、うちの大学の映画サークルが撮影に使用させてもらった話を聞いた俺は、その知り合いに頼んで一日だけ使用を申し込んだのだ。表向きは自主映画の撮影だが、本当はここで結婚式をするためだ。結婚式といっても俺と明美、惣太郎と佳代子しかない四人だけの式だ。

「とうとうお兄ちゃんと結婚できるんだね」

明美が嬉しそうに微笑む。一週間後には俺と佳代子の結婚式がホテルの式場で行われ、その一月後には惣太郎と明美の結婚式が同じ場所で行われる予定になっている。しかしそれは俺たち二組の兄妹による偽装結婚だ。そして今日ここで行われるのが本当の結婚式。俺と明美、惣太郎と佳代子の結婚式なのだ。

「それじゃ始めようか」

俺の言葉に全員が頷き、服を脱ぐ。靴と靴下以外全裸になった俺たちは祭壇の前に進み、正面のキリストを描いたステンドグラスに手を合わせる。それから佳代子がベンチに座り、神父役を務める惣太郎が壇上に立つ。俺は明美にウェディングドレスのベールだけを頭に乘せ、向かい合って惣太郎の前に立った。

「汝、<sup>×</sup>明美は兄を夫とし、病める時も健やかなる時もずっと傍にいて一生添い遂げることを誓いますか？」

「はい」

明美が頷き、俺も同じように誓いを立てる。それから明美が小4の時に行った隷属式と同じように俺が明美の唇にキスをし、その後明美が跪いて俺のペニスに口づけをする。俺たちの結婚式は普通のそれとは違う。夫婦であると同時に主人と肉奴隷の関係でもあるのだ。夫婦としての愛の誓いと共に改めて隷属の誓いも立てる。

「ううっ」

長い口づけの後明美が舌で亀頭を舐め回し、ペニスを口に含む。口内で舌が絡みつき、ペニスがビクビクと震える。たまらない快感だ。

「誓いの射精を」

惣太郎の言葉と共に明美の頭をぐつと腰に押し付け、思いきりザーメンを吐き出す。腰を痙攣させながら、最高の快感に酔いしれ妹の口

内にありつただけの欲情を流し込む。

「ああっ！明美っ!!」

ゴクゴクとザーメンを嚙下する喉の音が静謐な教会に響く。俺は感動に浸りながら明美の頭を離し、満足げに頷く。明美も唇に付いたザーメンを舐めとり微笑んだ。

「二人に幸あらんことを」

惚太郎が朗々と言い、佳代子が拍手をする。これで俺と明美の結婚式は済んだ。次は惚太郎と佳代子だ。今度は俺が神父役になり、やはり全裸にブーケだけを被った佳代子と惚太郎が向かい合って立つ。

「汝、△△佳代子は兄を夫とし……」

俺たちと同じことを行い、佳代子が惚太郎のザーメンを飲み干して二組の兄妹による結婚式は無事に終わった。俺たちは改めて妹を永遠に愛することを誓い、妹たちは兄の肉奴隷として永遠に犯されることを誓う。

「おめでどう。これで俺たちは本当に結ばれることが出来たんだ」

「はい、おめでどうございます。佳代子、幸せになろうな」

「うん」

俺たちは教会を出て、借りていた鍵でしつかりと施錠してから車に乗り込んだ。外はすっかり暗くなっている。俺たちはこれから近くのラブホテル向かい、初夜を迎えるのだ。

「とうとうこの日が来たな」

感慨深く俺は呟く。今夜、ついに明美と子供作りをするのだ。ここ一月くらい明美と佳代子はピルを飲んでいない。俺と惚太郎は今夜妹と生セックスをして子供を作るのだ。俺たちは皆この日をずっと待ち焦がれていた。

「可愛い赤ちゃんを産んでくれ、明美」

「うん」

助手席の明美が俺に微笑む。無論戸籍上は明美の産む子は惚太郎の子供ということになる。佳代子の産む子の父は戸籍上は俺だ。しかし俺たちはお互いの子供を平等に大切にし、愛し慈しむと約束していた。四人で俺たちの愛の結晶を育てていくのだ。妹を孕ませるそ

の時を思い、俺は固いハンドルをしっかりと握り締めた。